

「平和の礎」第七集発刊にあたって・・・

広島・長崎への原爆投下から八〇年を迎えた大切な年二〇二五年。

経験者の高齢化が進む中、これまで発刊に載せられた寄稿と聞き取りの中から、原爆被害を記したものの再掲載と、新たな方々の体験記の寄稿・聞き取りに取り組み、収録しました。

平和日本の礎となられた多くの御霊に捧げ、あなたをはじめ、現在・未来に生きる方々にお伝えします。

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

(会長 草薙正己)

目次

発刊にあたって

▽寄稿・聞き取り（敬称略）

古賀好松（倉治） 原子爆弾被爆の日	3
宇都宮唯男（青山）《原子野を回想して》	7
谷村千枝（郡津） 命	13
住井麗子（妙見坂） おもなできごと	17
住井麗子（妙見坂） 残したい母の体験	21
可児義明（妙見坂） 激動の時代を生きて	25
渡辺悦子（星田） 戦争で亡くなった父・叔父のこと	30
彦坂麗子（妙見坂） 原爆が落ちた時	32
坪井貴美子（郡津） 私の戦争体験記	34
高橋敏子（私部） 私の戦争体験	37
寺田露子（天野が原町） 私の戦中・戦後の体験	40
交野市「平和と人権を守る都市宣言」（日本文および英文）	42
あとがき	44

題字 渋谷正

表紙 「コスモス」は、秩序と調和ある宇宙を意味することば。

花のコスモスは秋の桜とも呼ばれています。

原子爆弾被爆の日

古賀好松(倉治)

「平和の礎」P9～P12

三日前に広島に凄い爆弾が落ちたそうだと巷の間で話題のトツプになっていた。現在のように情報が発達していなくてピーピーと雑音の入るラジオを耳に傾け乍らそのニュースを知った思い出がある。当時は新型爆弾だ、風船爆弾だ、と勝手に名前を呼んでいたけれどこれが原子爆弾だと知るには少々時間がかかった。

その凄い殺傷力のある爆弾に直面しようなんて夢にでも考えていなかった。しかし長崎が軍需工場地帯で三菱系の造船所、製鋼所、私の職場だった兵器製作所と規模の大きい工場が並んでいたのも、当然爆撃の標的になるであろう位は予想ができていた。

昭和二十年八月九日、連日暑い日が続いていてこの日も朝から暑い、工場出勤して間もなく敵機来襲の警戒警報が発令された。

ここの所毎日頻繁になってきた、職場の鍛造工場長が何を考えてか急に「どうせ死ぬのだったら良い服に着換えて死にたいのう」と冗談まじりで発言された。事務所内の技師さん、技手など数名と学徒動員の女学生二名が通勤服に着換えた。矢張り空襲警報に

入った。例の様に工場横にある防空壕へ入った数分後何ごとも起こらず解除になった。やれやれといった気分職場に戻ってどれ位経っただろうか、再び空襲警報が発令されたのか、どうか、記憶が薄い。防空壕に入っていた人が皆無だったのをみても空襲警報は発令されていなかった状態だったと思う。瞬間の閃光が目にも鮮やかとでも表現したらいいのか、その色は言葉で表せないピカーと一面に走ったと同時に大音響が轟いた。周辺が一瞬にして夜を思わせる程まっ暗になった。もう何がどうなっているか全く分からない。余りの凄さに違った世界にでも入り込んだのかと錯覚さえ感じた。果然とし乍ら暫くしてから爆撃を受けたのだと悟ることが出来た。自分を見失っていても逃げるという本能は失っていなかったようだ。

工場横の防空壕へ逃げたのが今だによく思い出せない。微かな記憶の中で事務所から工場への通常の出入口でなくて中窓のある所をぐり抜け工場へ出て防空壕へと、と考えていたけれどその時は既に中窓や出入口など当然ふっ飛んで潰されており幻想だったのかも知れない。瞬間そこで見たもの聞いたもの総てが現実かと目耳を覆いたくなる惨状だった。工場の屋根はなく柱も殆ど立っていない。天井を走っていたクレーンも地上に叩き潰され、それらの破壊により多くの人々が下敷きになったり押し潰されたりで負傷者が多数出てる様だった。或る人は絶叫し、或る人は呻き

將に地獄絵巻を見ている感だった。

それでも大勢の人々が防空壕へと逃げている。私も夢中で防空壕へ入った。余り大きくない壕なのでいっぱいの人だ。皆血だらけで顔など真黒だ。その中で一人の職工さんに凄く出血していたので注意したら「お宅も耳が切れて出血してますよ」といわれ手を当ててみて初めて耳が半分に切れて垂れ下がっているのに気づき頭も背中も傷だらけを知った。

事務所の机の配置で私の机だけが製図用で表面が斜めで、椅子の後ろには兵器部品を製図した青写真を詰めたガラス戸棚がずらり並んでいて、爆風で私の背中から叩きつけられた為、頭と背中に無数の切り傷を負い耳も切られたようだった。壕の中で警報の時ズボンに巻いていたゲートルで耳を横にくくった。

外を覗いたら絶叫と号泣を聞き続け乍ら荒涼と化した中を殆どの人が山の手の方向へ退避していた。幸い工場の横に側溝（巾約二米位、水も少し流れている）の中に入り皆の後ろへ続いた。その途中戦闘機が機銃掃射をしてきた。之は側溝の中の人々を狙わなくて威嚇の為に道路を撃っていると感じた。山の手の方へ行ってもどこも燃えてるし真夏の道路は熱くて長い距離は歩けない。下り坂にかかってやや大きめの川に出た。中を歩くことは不可能だったけれど岸边を歩いて驚いた。男女を問わず肌が直接太陽に当たって露出している部分は凄いヤケドで真黒になり、しかも水

ぶくれで爛れて腫れあがっている。何と高熱の閃光だったのかと改めて感心し乍ら、余りの光景に唯呆然として動くことさえ出来なかった事をよく覚えている。

そんな人々は皆、水を欲しがっていた。しかし川の水は飲めないうし困った状態だった。誰かが「水を飲んだら死んでしまうよ」と言った。多分末期の水を連想したのだろうか。

こんな状況がこの世にあるうとは神様にしても想像に難かったと思う。累々と並ぶ絶命？の方、重傷で殆ど死と感じられる様な方々、どうしたら援助出来るのか若輩だった私らにはその術が見出せなかった。何人かの集団があつての行動だったら、何らかの対策があつたらうと、今に尚悔いが残る。自分自身が退避に窮々としている最中、為すことが出来なかった。後日談に依ればヤケドの方々はケロイドで随分苦しみ、又放射能を浴びておられ難渋されたと聞及びました。

行先不明の逃避行だけれど治療所か、病院らしき所を目標にしているけれど、それらしき所は見つからない。駅かその周辺に辿りつけばなんとかなると思ひ乍らひたすら歩く。住居だった所も見たいと小高い丘の上に立ってそれらしき方向を見渡すけれど何一つ残っていない。道路の形状を察して想像するだけで全くの廃墟だった。その筈、住居辺りが爆心地に最も近くだったと後日判明した。尚、之も後日談だけれど寮母さんが二人おられていたけ

れど、二人共上半身は丸焼け状態で寮の前に設置してあった防火用水の桶に頭を突込んだ儘で絶命しておられたと聞き哀悼の気持ちでいっぱいだった。こちらの周辺の方々は殆ど防火用水に頭を突込み乍ら絶命されていたとのことでした。屋根瓦が熱で全く変形しているのを見てもいかに高熱の閃光だったかが想像できる。住居の近所と思わしき所に寄って見たけど私物らしき道具は何一つなく、一面灰だらけだった。それでも歩くうち鉄道の線路近くへと足は向いていた。途中どちらを向いても負傷者ばかり。暫くして長崎本線の線路へ辿りついたけれど線路の両側は悲鳴をあげ乍ら重傷者がいっぱいだ。

その中に列車が駅でない所で停まり負傷者を乗せ始めた。ここでは私ら軽傷の者は手伝いをする事が出来たので少しは援助に貢献したなど、気休めになった。そんな状況が一・二回続き軽症者は後回しで運んで行っている。多分治療の出来る所へピストン運転をしているものと思っていた。私らが乗れる時は周囲は既に暗くなっていた。列車の中は血生ぐさくて気分が悪い。道の尾駅を過ぎてトンネルに入った。所が出口真近で停まった儘動かない。不思議に思っていたら空襲警報で敵機が上空におるらしい、と伝え聞き車中の悪臭と列車の煙が列車内に充満し最悪の状態だった。漸く解除になり走り出し終点らしき所で全員下車、少し歩いて治療を受けるべき所へ入った。夜中なので判断し難いけれど病院で

はなく、どうも学校の講堂の様だ。堂内は空襲に備え薄暗く負傷者で満員だった。呻き、悲鳴、号泣など異様な中、医師の先生、看護婦さん辺りが懸命の治療が施されていた。今考えたらこれだけ大勢の負傷者だし、殆どの方が外傷かヤケドの方が多かった様だし、赤チンキを塗り麻酔もそこそこに縫合されている様に映った。

泣きじやくり乍ら暴れて治療を受けている少女がすぐ横にいて、顔を縫合して貰っていたのでよく見たら同じ職場で事務の補助をしていていた学徒動員の女学生の子だった。がんばってとその子の名を呼んで励ましたら、ひどく泣きじやくり始末が悪かった。顔が変形する位酷く切り裂いていて重傷だった。長い時間が治療にかかった。治療中も痛さに手足をばたばたさせるので隣の方と二人で手足を押え込んで手術を終わった。

十四・五歳の女学生がこんな目に会ってと思うと可哀想で同情の涙を禁じ得なかった。

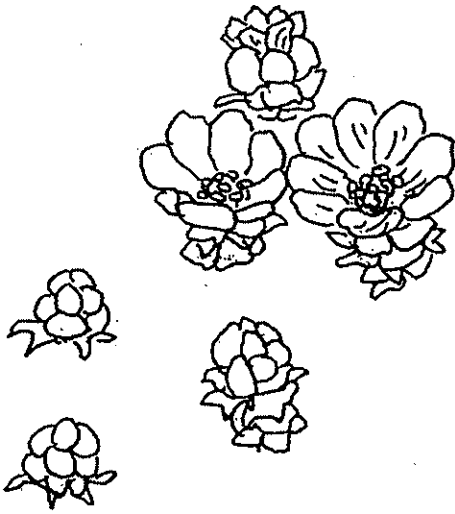
そんな負傷者が超満員の状態だった。地獄のようだ表現したいけれど（地獄を見たことがないので想像の域を脱することは出来ません）その夜は一睡も出来ずに朝を迎えた事をよく覚えていた。自分も耳を表裏から縫合し背中に無数の切り傷があったので対策本部へ申し出て田舎で治療を続行するべく罹災証明を頂いて帰省した。それから五日後田舎での通院帰りに終戦を知り、之で

空襲がないと、ホッと、胸をなでおろした思い出がある。

それ位飛行機が怖かった。今でも暗い状態で眠っていて急に頭上の電気を点灯されるとビックリして飛び起きることがよくある。原爆のあの閃光が脳裏に焼付いているのかと思う。

八月九日午前十一時三分は生涯絶対忘れ得ぬ私の原点だとも思っています。半世紀以上経った今、命の尊さ、生きてこれたことへの感謝を感じ乍ら戦争ましてや核戦争など人類の滅亡への道を辿る様なことが起こらないことを祈るのみである。

合掌



《原子野を回想して》

宇津宮唯男(青山)

「平和の礎」第二集P3～P7

ことし八月六日午前八時十五分、六十四回目の原爆忌を迎えます。光陰矢の如し。世の中もすでに昭和から平成とかわり、投下された原爆の日は随分昔のこととなりました。いまでは原爆のことなどすっかり忘れられそうです。

半世紀以上、自分の口から一度も語ろうとはしなかった。が、後人に残すとするならば、どうしても原爆の悲惨な状態を避けて通れないだろうと思う。広島の人には原爆のことを「ピカドン」とよびます。爆発の瞬間に目撃した閃光と大音響とともにおそってきた爆風を、こんな言葉であらわしたのです。まるで写真のマグネシウムを焚くに似た閃光は、爆心地に近い人はオレンジ色に、離れた人は青色く見えたと言います。

「誰かあ。市内に詳しい者はいないかあ！」軍服姿も凛々しく見習士官の引率士官が大声で叫ぶ。廿日市(はつかいち)駅の前は列車から降りた人で立錫の余地もなく、だれ一人として応答する者はいない。私は六つ先の駅の海田市(かいたいち)まで帰るのです。「自分があ、行きます！」「おお、じゃあ頼むぞ！」。

小隊(約三十余名)と、南洋諸島のトラック島から帰還した従軍看護婦三名は二列縦隊となる。

国鉄の線路に沿うた国道をひたすら歩く。途中、五日市(いつかいち)か廿日市方面?へ逃避して行くのか、すれ違う人達の衣服は油じみてボロボロに破れ、頭髮は逆立っていた。会う人はみんな両手を胸のところにあげており、ボロぎれのような皮膚が手頸で垂れていた。異様なまでに焼き爛れた皮膚が、シャツの破れからもダラリと垂れさがっていた。今にも倒れんばかりに次々と歩いて来る。顔といわず、足といわず、焼けた泥まみれの皮膚は歩くたびに揺れていた。

いままでに見たこともない異様な火傷のあとは、この世にあらわれた幽霊の(お岩さま)のようだ。

「おねがいです。みずを飲ませてください」と、すがりつくように寄ってきた声に驚き、思わず後退(あとずさ)りした。私は悪夢を見ているようでした。

夏の陽も傾きかけた午後七時前。己斐(こい)から市電の軌道をたよりに進む。天満(てんま)の鉄橋は犬釘だけでブラブラしている。下の天満川の河原から「へいたいさーん。たすけてください」。 「みず、水をください」と、幾多の人の悲壮な声。火傷に水は禁物とされていた。

幾度となく呼び止められ、水を求め助けを求められたが、東北

に派遣される見習士官には一刻の余裕すらありません。「すぐに救護班が来るから、もうしばらく元気をだして待つように！」と、慰めておくほかは無かったのでしょう。歩く足元は油のようなもので濡れている。私のすり減った布靴は、夜目にも黒くなり足の裏は濡れていた。これが黒い雨と後で知りました。土橋（どばし）から、紙屋町（かみやちょう）八丁堀（はっちようぼり）あたり近くと、道々の火災はすでに焼け落ちて洋風の建物が恐ろしくまっ黒な残骸となって残っている。ところどころで残り火が光っては消え、消えては光る。夜風が吹けば異臭が鼻をつく。アッ、人が焼けている。近くの瓦礫の中から断末魔の苦悶の音が聞こえる。途中、瓦礫につまずき、死体につまずき、垂れた電線に足をとられ、やつとの思いで海田市駅にたどりついた。あたりがうつすらと見えるほど明けてきた。

小休止のあと、見習士官と従軍看護婦は始発列車に乗り込む。列車が見えなくなるまで敬礼で見送った。

翌、八月七日（火曜日）一睡もせず寄宿舎の同僚の搜索で市内に入る。昨夜は見え辛く戸惑ったが、広島駅に近い荒神橋（こうじんばし）の欄干は吹き飛んでいた。橋の下にはまるで犬か猫のように、ボロボロのまとわりついた死体は何体も浮かんでいた。福屋付近の舗道には、灼熱の光線をうけて、風船のように膨れた顔の人。髪が焼け顔がくずれた人。みんな大人のようにでしたが、暑

い舗道に一列に並べて寝せられていた。岡山県の救護班の人が、バケツの中にメリケン粉をといたような薬をハケでベタベタと塗っていた。痛さに苦悶する者、声を上げて叫ぶ者、もう見動きひとつしない者もいた。一滴の末期の水さえ口にせず、息を引きとったのであろう。

福屋百貨店のすぐ近くでは、死体収容所の札が立ち、米俵を積み重ねたように死体の山があった。焼けた軍靴を履いているので兵隊ですが、不思議なことにとどの犠牲者も衣類はなく裸同然だった。百貨店の横の焼跡は急ごしらえの焼却場となり、束ねた薪を敷き、重油であろうか死体にかけて焼かれる。次から次と死んでいく犠牲者を、二人の兵隊は手と足を持って、燃え盛る火の中へ丸太のように投げ込む。犠牲者はほとんど兵隊だったと思うのだが、もしかして、あの中にはまだ息のある人がいたのではなからうか？

広島県産業奨励館（原爆ドーム）に近い相生橋（あいおいばし）に遺体収容所があった。十歳前後の男の子が、父親の死体を肩に担ぎ這うようにして運んでいた。紙屋町のほうから来たのであるうか、膝に血をにじませ、汗をびっしょりかいていた。往来の大人は多かった。だが、みんな忙しそうに歩き、誰ひとり声をかけてやる者はいなかった。

場所は今でも定かではないが中島町か土橋町あたりだったと

思う？、言葉で言いきれぬほど、至る所に膨れた死体が無数にあった。多数の死体の中には女の人も転がっていた。幼い子が無心に遊んでいる。母親の死も知らず眠っていると思っているらしい。ここでも大人は忙しそうに急ぎ足でその場を通り過ぎて行く。先ほどの父親を背負った男の子。無心に遊んでる幼い子。痛々しく可哀相で後ろ髪を引かれる思いでしたが、無力な私もその場を通り過ぎた一人でした。

投下四日目ごろ、ヒロシマに落とされたのは〈新型爆弾〉と聞きました。〈原子爆弾〉と耳にしたのはかなり後のことでしたが、原子と言われても、無傷の人が突然死んでも、放射能とは何か、認識することは私には全くできませんでした。

相生橋（あいおいばし）の市電の停留所に、リュックサックを背負ったまま、首をうなだれ座ったまま死んでいる。男の人のようだった。炎熱の路上には焦げたキュウリやナスが転がり散っていた。買い出しの帰りなのか里から届けに来たのであろう。哀れな姿になって……。下の元安（もとやす）川や本川では人が流れっていく。馬も流れていく。また人が、人が流れていく……。長い柄（え）の鳶口で流れていく遺体を浅瀬に引き上げていた。

七日の夜ともなると市内の火災はほとんど消え、松の樹の幹が、その後日もくすぶっていた。まるで死者に供えたお線香のように……。

岡山県の救護班や日赤の人ばかりでなく、肉親や知人をさがす人びとが続々とやって来た。我が身も皮膚を焼かれ教え子を尋ねまわる教師。血に染まった防火用水の中で、消し炭のように焼かれた黒こげの母が、黒こげの子を抱き死んでいた。また娘さんが孫娘を捜しておられたのか、灼熱の光で焼かれた顔では判別できず、焼けたモンペの灰をこわさぬよう、太陽に透かして布地の模様を確かめている老夫婦。目に涙をため老婆は首を横にふっていた。

西練兵場前の舗道では将校であろう、うつぶせで全裸の軀に焼け焦げた長靴（ちようか）を履き、軍刀は曲って頭の横に転がっていた。

照りつける太陽を遮るものとなない焼け野原。産業奨励館（原爆ドーム）の瓦礫の中にも顔の焼き崩れた人。焼きただれた軀に無数のガラスの破片が突き刺さっている人。息絶えているのか身動きすらしない人。「日本製鋼所の人はいませんかあ！」私は思わず叫んでいた。

前に流れる元安川や本川の水ぎわでは、重傷者が水を飲み、腹這いで行っただけでしょう、流れに顔を突っ込んで人の上に人、重なり合って死んでいた。

同僚を捜しあぐね、当てもなく歩く舗道のここかしこに、膨れた死体が無数にころがっていた。土橋の交差点に丸焼けで骨だけ

また土橋付近では、家屋疎開の勤勞奉仕に出ていた中学生や女学生だろう。躰を焼かれて皮膚が破れ、地面をころがりながら氣違ひのように「おかあさん。おかあさん！」と、大声で泣き叫んでいた。あの声はいまでも脳裏からはなれません。まさに、この世の生地獄でした。

ここかしこの救護所付近には数知れず、貼られる場所には至るところに尋ね人の張り紙があつた。「誰々は元気。○○○に來い」とか。「お父さん、お母さん早く來て。○○は火傷をして○○の田舎にいる」などなど。風に吹かれ、今にもはがれそうな張り紙もあつた。

「救護所はどこですかあ」。「救護所はどこですかあ」と、尋ねながら大勢こちらに向かつて来る。よく見ればほとんどの人が、完全に衣服を着ている者はいない。なかには全裸体の腰にかろうじて敷ゴザを巻きつけ、ヨチヨチ歩いて来る者もひとりやふたりではなかった。そのうえ大抵の人は、黒く焦げた皮膚の破れから赤い血潮が流れており、患部が化膿して蛆（うじ）がわき、鼻をつくような悪臭を放っていた。

原爆で二人の叔父が死んだ。一人は隣組から家屋疎開に出て、どこで亡くなつたかわからぬままだ・。もう一人の叔父は家の梁（はり）の下敷きになり、火に追われ叔母はかろうじて逃げたものの、叔父は半焼けにされた。その叔父の茶毘を河川敷でしているところだった。その夜の河川敷は、あちらこちらで茶毘の火が燃えていた。

広島で被爆した負傷者が生死の境をさまよっていたころ、長崎で二発目の原爆が投下され、新たな犠牲者が生まれたのです。広島市などによると、原爆による死者は昭和二十年末までに約十四万人と推定されているのです。

戦争があつたことを忘れていつてしまう時代に、平和の有り難さや、食べ物が豊富にあるという喜びを改めて感じ、戦争は絶対にしてはなりません。一瞬にして尊い生命が失われ、幸福を奪われるのです。人間と人間との殺しあい、これが戦争です。もう二度と戦争のない国であつてほしいと思います。

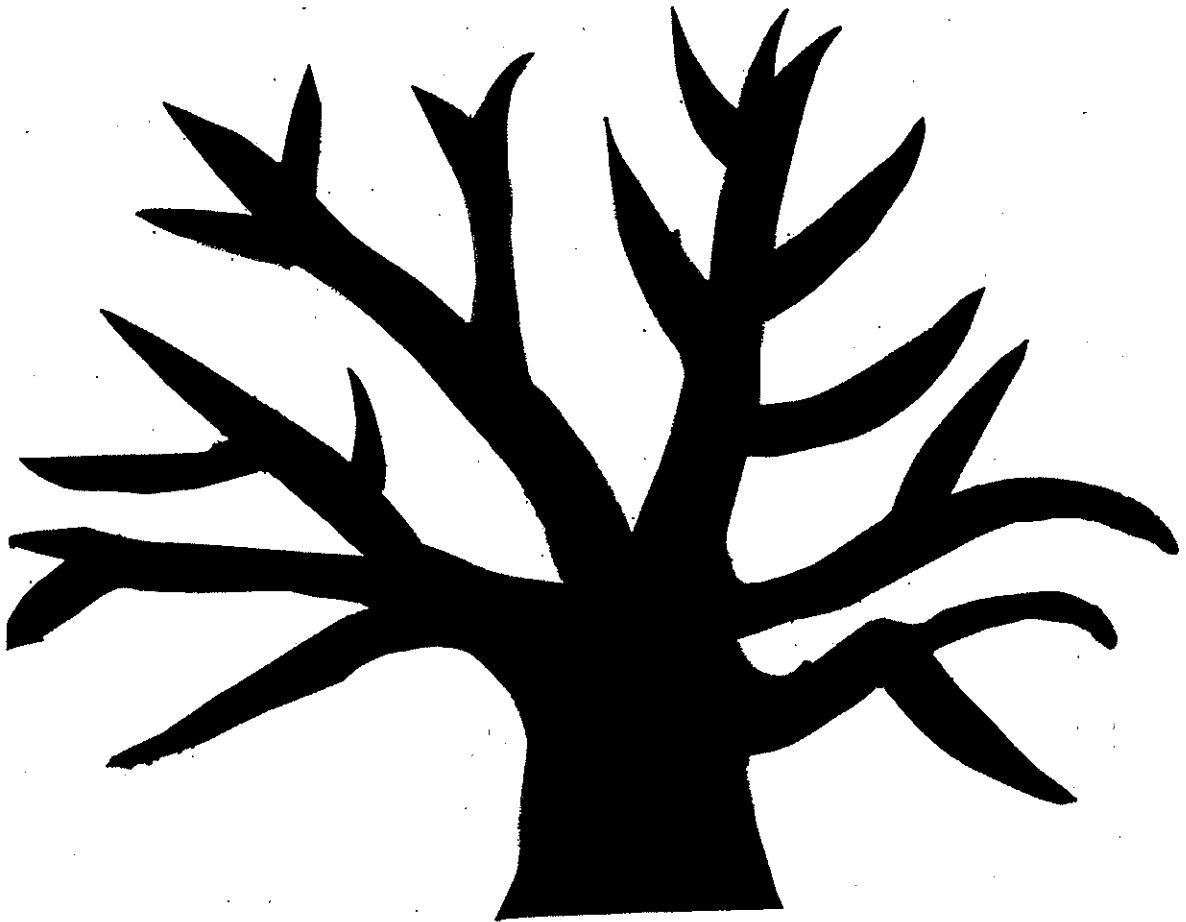
川柳 《原爆砂漠》

- ★ 雲ひとつ無き青空に魔の光
- ★ ヒロシマはこの世の地獄見て 裂ける
- ★ 虫けらのごとく原爆焼き殺す
- ★ 火に追われ逃げたと嘆く夫（つま）捨てて
- ★ 助けてあげて この人息がまだあるよ
- ★ 泥水をうまいと言って息絶える
- ★ ヒロシマは火の海だよと子を案じ
- ★ 血だるまの無惨なすがた眼も焼かれ
- ★ 死んだ子の最後の言葉「もう寝るよ」
- ★ 息のある人もいたる遺体処理
- ★ 神様のいたずらですか生と死は
- ★ 死んだ子を背負う男のむせび泣き
- ★ 風吹けば死臭ただよう焦土の地
- ★ 恥部かくす両手に蛆が這う 無惨
- ★ 川の水飲ませてくれと掌（て）を合わせ
- ★ 原爆はたった一人の母を焼き
- ★ 泪（なみだ）がいっぱいあってよかった 母の死に



- ★ 情けない親の死に目に逢えぬとは
- ★ 神さまを悪魔と呼んでみたい日ぞ
- ★ 茶毘の火へケラケラ狂女笑うなり
- ★ 虫の息かすかに母を呼んでいる
- ★ 風もなく骨の崩れる爆心地
- ★ 原爆砂漠こげたうつわにほねひろう
- ★ 黒焦げにガラスの破片突き刺さる
- ★ 親の骨掘りし少女の細き腕
- ★ 何があっても 壊れぬ石になりたいよ
- ★ 泣き叫ぶ少年母を胸に抱き
- ★ 人間は死ねばゴミだと言った人
- ★ 原爆に打ちのめされた神の国
- ★ 玉音（ぎよくおん）にひれ伏す傷へ蠅が群れ
- ★ 復興へ瓦礫も骨も積み込まれ
- ★ 不自由に生きるケロイド隠しつつ
- ★ 昭和の代（よ）まるごと生きている不思議
- ★ 原爆の惨めさ聞く子涙して
- ★ この疵は煮え湯かぶれば解（わか）るはず
- ★ 戦争はしてはならぬと見せる疵





命

谷村千枝(郡津)

「平和の礎」第五集 P38～P40

私は、大正九年生まれの九六歳です。交野市郡津に生まれ、結婚する二七歳まで郡津で育ちました。

家族は、両親・姉・弟二人の六人家族でした。姉は二二歳で結婚し、九〇歳で亡くなりました。二つ下の弟は海軍士官学校へ行き、軍人となって潜水艦で北満の青島へ上陸、二年後に帰国し、広島に居りました。下の弟は陸軍士官学校へ行き、昭和二〇年終戦になる前に卒業しました。

男性はいわゆる赤紙という召集令状が来ましたが、私には女性ということで、二三歳の時ピンクの令状がきました。小学校の修身場(今の運動場)に〇日に集合しなさいという通知でした。集められた中から、召集されても家庭に大きな影響のないもの三〇人が、枚方の砲兵工廠に配属されました。仕事というのは、兵隊さんの布団の綿が千切れているのを糸で綴りながら、補修することでした。毎日郡津から中宮まで電車に乗って通いました。駅からの坂道を歩き、一列に並んで門のところまで、チェックがあり、「頭(かしら)、中」と

いう声で中に入ることができ、帰りには「ご苦労さん」と声掛けがありました。毎日、おにぎりを持参していきました。暑い時に布団の綿を糸で綴っていく作業は、地獄のようでした。布団の中にはノミがたくさんいて、家族には「またノミを持ち帰ってきたね、かゆい、かゆい」と言われました。一年ほど勤めてから、叔父の会社を手伝うように言われて、友達と三人でいきました。仕事は、金庫番で、空襲警報が鳴ると、現金を小さな金庫に入れてそれを防空壕に持って入るようにいわれていました。その会社で終戦まで働いていました。

防空壕を各家で掘るように言われましたが、父が高齢のため掘ることができず、隣の人が大きな防空壕を掘ったので、私の家族も入るように言って下さいました。毎日のように交野村役場から大きな音で空襲警報が鳴りました。

昭和一八年ごろ、その日は、空襲警報も鳴らず、両親も出かけ、私一人が家におりました。洗濯物を干しに外の物干し場にいました時、アメリカの戦闘機が一機私目がけて、急降下してきたので、あわてて家の中に飛び込みました。一瞬の差で、パンパンと二発発射してきました。あの時ほど怖かったことはありません。今でも頭から離れません。二〇分ほどして叔父が駆けつけてくれました。叔父が屋根を見に行ってくれますと、蔵の瓦が割れて、一〇センチほどの不発弾が二

発突き刺さっていたそうです。あとで叔父が見せてくれました。

八月六日、広島に原爆が投下されたニュースを聞きました。広島にいる弟の安否が気遣われましたが、何も情報がなく家族みんなが心配していました。叔父がもう葬式をだそうと言っていました。弟の安否がわからないままお葬式をだすのは嫌だ、広島まで確かめに行きたい、と言いましたら、叔父がなんとか広島までの往復切符を手配してくれました。原爆投下から二週間後、父と二人で夜行列車に乗って行きました。真つ暗闇の車両で何も見えず、手探りの中で掴んだのは、馬の足でした。馬を運ぶ貨車だったのです。夜明け前に広島の二つ手前の駅で降ろされました。そこから先は線路がなくなっていました。広島駅の駅まで暑い中、歩きました。広島駅の駅舎は跡形もなく、ホームのベンチだけがひしゃげた形でありました。駅を出たところで最初に見たのは馬の死体でした。五分ほど歩くとトタン板の上で死体を焼いていました。至る所でトタン板が真つ黒になっているのをみました。白い山のようなものがあつて、近づくると焼いた人のお骨が、山のごとく積んであり、縄を張って半紙が挟んであつて、亡くなった人の名前が書いてあり、身内の人は骨を持って帰るようにとありました。

弟がいた兵舎の場所もわからず、行き交う人々は、水を求めて川の方へ移動していて、尋ねることすらできませんでし

た。一人の水兵服の人を見つけ、弟の名前を尋ねると、「生きておられます、兵舎で機密書類を集め、残務整理をしておられます」との返事、兵舎で弟の無事な姿を確認でき、父と大喜びしました。持ってきたお握りを食べるようにと言いましたが、「僕はいいから、この兵舎で働いていた娘さんが怪我をしていて、両親の安否を確かめに自宅へどうしても帰りたいというので、連れて行って欲しい」と頼まれました。兵舎にあった車でその娘さんを自宅まで送り届けましたが、あたり一面は焼け野原、けれども娘さんは「生きておればぜったい両親はここに来るはずだから」と、どこでも動かない、仕方がないので持ってきたお握りをあげて、草むらに寝かせました。おそらく誰も来なかったら自分も死ぬつもりだったのだろうと思います。

その後、広島線に乗ったとき、娘さんたちの会話で「あと何日なの?」「私三〇日って言われたの」「私は三五日から四〇日ぐらいって言われたわ」なんのことだろうと不思議に思っていましたら、よく見るとつり革を握っている娘さんたちの腕の内側の傷口一〇センチに、ウジ虫が群がっていて、自分たちの寿命の話をしていることに気がつきました。

こんな悲惨な状況の中で、思い出しても笑えることは、父と大阪に戻るつもりで乗った列車が、下関行だったことです。窓から見る景色がどうも往きと違うのに気が付いて、慌てて車掌さんに言つて、すぐに反対側の列車に乗りしました。大阪

行の列車は、引き揚げの兵隊さんで大混雑、屋根の上まで人が乗っている鈴なり状態でした。小用を足すのに窓から出るため、お尻を押してもらい、草むらで用を足し、又窓から入ってもらうのに引つ張り上げてもらったりしました。

広島駅から、又二駅歩いて、大変な思いで大阪まで帰ってきました。

弟は、その後一年広島から帰れませんでした。

帰宅した弟の話では、八月六日の朝、呉に来るようにとの指令で、将校三人で一〇時に駅に集まる約束をしていたそうです。が、その朝から空襲警報が鳴りっぱなしで、大きな音に飛び起きて、兵舎まで走っていき、二階の階段の所まで来たら、死体が累々と重なり合っているのを見て、しばらくは呆然と立ち尽くして・・・やつと『生き残った自分たちで出来る限りのことをしなければ』と決心したそうです。元帥の宮殿下も亡くなっておられ、二三歳の中尉の弟が全責任を負って、まずは秘密書類を焼く・亡くなった友の家へ知らせる・生きていても歩けないものとお互いに励ましあつて、夜昼なく働いたそうです。

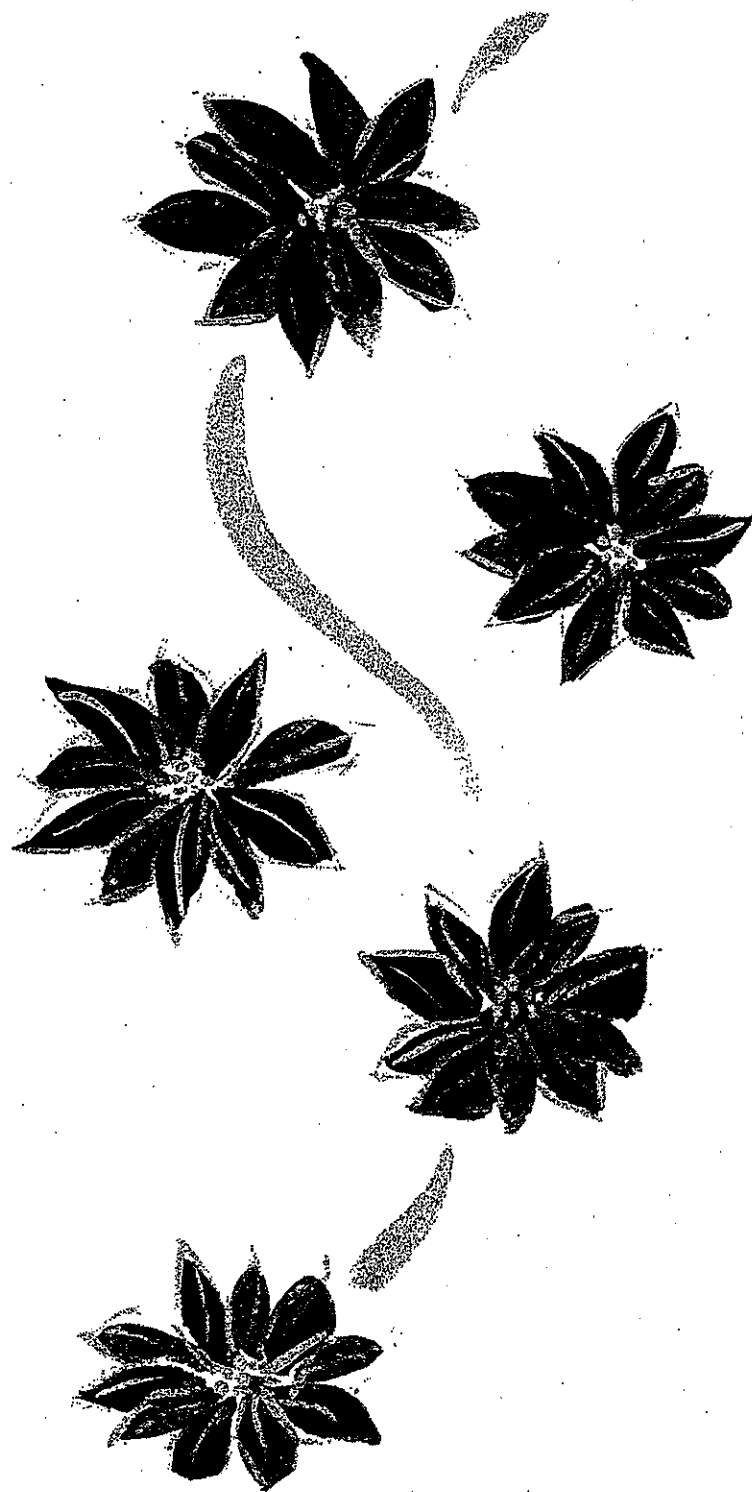
父と私が弟に会った時は、父も私も本人が怪我をしているとは、知りませんでした。帰宅後、母が毎日毎日ガーゼで手当てをしている様子を見ていたぐらいです。原爆投下の時でしょうね、そばにあつたチタンの箱が割れ、その破片が横腹に刺さったそうです。そのころには原爆の被害について周知

されましたが、横腹が化膿していた弟に、叔父が「絶対部屋から出るな!」ときつく言っていました。父と私は、幸いなことに広島に一日いましたが、その間水も飲まず、お握りも食べなくて、大阪にトンボ帰りしたのがよかったのか? 被爆しておりませんでした。

弟は、治療には長くかかりましたが、一度も病院へ行かず、母の愛情だけで傷口も塞がり、元気になりました。京都の会社に入社が決まり、休日は大好きなゴルフを楽しみ幸せそうでした。お陰様で六九歳まで長生きさせていただきましたが、これも偏に、御神・御仏様のご加護と感謝しております。

今思いますが、日本の建物はほとんど耐震性になっていて、大家族で住むことができます。『親の姿を見てこどもは育つし、ご近所づきあいも大事にして、困ったときに助け合う。』こういう日本の良いところを残していって欲しいと念じて居ります。





おもなできごと

住井麗子(妙見坂)

「平和の礎」第三集 P18 ～ P21 (一部加筆修正)

戦争とは、ある政治目的の為に、政治、経済、思想、軍事的な力を利用して行われる政治集団間の闘争である(世界大百科事典より)と言われています。世界の歴史上、大きな戦争として主に

第一次・第二次世界大戦があげられると思います。第一次世界大戦はヨーロッパの国家間の戦争として始まり、ロシア、オーストリア、ドイツの三帝国の崩壊によって社会主義国ソ連の出現となりました。一九一九年パリ平和会議は米英仏伊日の五大国で議事が進められ東アジアの日本の発言力が強大になるという結果を招きました。第二次世界大戦はドイツのポーランド侵攻から一九四五年九月二日の日本降伏文書調印まで続いた戦争です。この戦争はドイツのナチズム、イタリアのファシズム、日本の軍国主義が行った対外侵略とそれに対する抵抗の戦いで、戦争にヒト、モノのすべてが動員された全体戦争と言われています。さらに科学技術も動員され兵器開発が急速に進み核爆弾の開発となる。アメリカは戦争の早期終結の為に、原爆を使用する決意をし、日本にボツ

ダム宣言を送るが日本がこれに応じない為、原爆を投下しました。これにより広島、長崎の悲劇が起きました。ソ連も参戦し、この事態から日本は降伏。終戦を迎えました。平和の礎に投稿された方々は、この時代を生き抜かれてきた背景を背負われて、その実話には第二次世界大戦の始まりから終わりまでの出来事が大きく影響されていると思います。二度と戦争のない平和な世界を願い核兵器の廃絶を叫びながら、この様な形の寄稿文を次世代に語り継ぐ資料の一部として掲載してくださることに感謝し、その時代の主な出来事を年代に追ってまとめてみました。

★一九三二年(昭和六年)

九月十八日 満州事変(日本の中国東北・内蒙古への武力侵略戦争)が起きる。日本関東軍は、中国東北部(満州)、満鉄線路(柳条湖付近)で爆薬を爆発させ、中国側の破壊工作として、中国の兵営である北大営と奉天城を占領、日本政府は不拡大方針をとつたが、戦火は満州全土に拡がり満州事変となる。

このころから軍人が力を持ち始める。

★一九三三年(昭和七年)

一月二十三日 日・中両軍衝突、上海事変となる。

三月一日 満州国建国宣言

五月十五日 五・一五事件(海軍の将校らが犬養毅首相を暗殺する)

政党政治が終わり、軍人の力が、さらに、強まる。

★一九三三年（昭和八年）

日本が国際連盟を脱退する。

★一九三六年（昭和十一年）

二月二十六日 二・二六事件（陸軍の青年将校たちが高橋是清蔵相らを暗殺する）

軍部の反乱事件の始まり。軍部の横暴が強まる。

四月十八日 国号を大日本帝国とする。

★一九三七年（昭和十二年）

七月七日 日中戦争、日中事変が始まる。（北京郊外、豊台に駐屯する日本歩兵隊が蘆溝橋付近で演習中、中国軍と、衝突、宣戦布告のないまま戦争となった）民主主義や自由主義の思想への弾圧が始まる。千人針、弾丸よけのお守りが送られ始める。（五銭、十銭を死線、苦戦を越えることの意で縫いつけたり、寅年生まれの女性には「寅は日に千里を走って帰るとの意で」兵士の生還を祈り自分の年齢だけ結び目を作る事が出来た）

★一九三八年（昭和十三年）

国家総動員法の制定で、日本国民総力戦体制が強まる。

人絹糸、配給となる。（切符制）

満蒙開拓青少年義勇軍訓練所開設

★一九三九年（昭和十四年）

五月十一日 ノモンハン事件（外蒙古軍と満州国軍衝突）援助するソ連軍と日本軍の戦闘となる。

七月 朝鮮人労働者の内地移住（日本政府は、朝鮮人労働者の内地移住に関して「民間事業所（自由募集）」の形で朝鮮人を駆り出すことを認めた）

九月 朝鮮人の強制連行、国民徴用令とする。

十二月 第二次世界大戦始まる（一九三九年～一九四五年）

★一九四〇年（昭和十五年）

日独伊三国同盟結ばれる

★一九四一年（昭和十六年）

三月一日 国民学校令を公布（小学校が国民学校と名前が変わる）
十月十八日 東条英機陸軍相を中心に新内閣成立。「対米戦争」の道を進む。

十二月八日 日本の海軍がハワイの真珠湾を攻撃する。
太平洋戦争始まる。

★一九四二年（昭和十七年）

日本国士がはじめてアメリカ軍機によって空襲される。

日本連合艦隊がミッドウェー海戦で大敗する。

もの不足のため配給制度が強められる。

★一九四三年（昭和十八年）

アメリカのワシントン州ハンフォード工場（後に長崎に投下され

た原爆のプラトニウムを製造)建設が始まる。

四月十八日 山本五十六連合艦隊司令長官大将戦死

日本軍、アッツ島で玉砕

九月三日 伊、連合軍に無条件降伏

十一月六日 大東亜会議(インド、タイ、ビルマ、フィリピン、

満州、中華民国、日本)七ヶ国

ガダルカナル島から日本軍撤退を始める。

中学生以上の学生や女学生が武器をつくる工場などで働かされる。

大学生も学業の途中で戦地に行く様になる。(学徒出陣)

★一九四四年(昭和十九年)

六月四日 連合軍、ローマ占領

七月七日 サイパンで日本軍全滅

八月二十二日 沖繩から九州へ向かう学童疎開船(対馬丸)、米海

軍潜水艦ボーフィン号の魚雷受け、沈められる。

十月二十日 海軍中央首脳会議で、敵に有効な打撃を加えられぬ

打開策として、第一戦将校の殉国精神と犠牲的至誠に訴えた。(必

殺、必死の体当たりを敢行する他ないと提起する) 出撃する神風

特別攻撃隊(十代後半〜二十代前半)に「神として体当たり神に

なれ」と、訓示する。

十月二十四日 レイテ沖海戦、日本連合艦隊壊滅

十月二十五日 神風特別攻撃隊出撃

大都市では国民学校の子供達の集団疎開が始まる。

サイパン島の日本軍が全滅する。

★一九四五年(昭和二十年)

二月十九日 米軍、硫黄島上陸

三月六日 国民勤労動員令公布される

三月十日 東京大空襲(B二九―三三五機が東京を襲撃焼け野原

となる)

三月十四日 大阪空襲第一回(B二九―二七四機)

三月十七日 神戸空襲(B二九―三〇九機)

四月一日 米軍沖繩上陸

四月七日 戦艦大和、撃沈される

五月七日 ドイツ無条件降伏

六月二十三日 沖繩空襲

七月十六日 ニューメキシコ州アラモゴードで、初のプラトニウ

ムを使った原子爆弾実験が成功

七月二十二日 米の原爆投下の目標選定委員会が、広島、小倉

新潟、長崎を目標都市に選ぶ

七月二十四日 ポツダムで米のトルーマン大統領がソ連のスター

リン首相に、新型爆弾の開発成功と日本への使用を伝える。

七月二十五日 米参謀本部から空軍司令官に、八月一日以降、原

爆を広島、小倉、新潟、長崎のいずれかに目視投下するよう命令。

七月二十六日 米、英、中連名「ポツダム宣言」発表

八月一日 米、広島に投下するウラン型原子爆弾「リトルボーイ」の組み立て完了。攻撃部隊は七機編成。B二九爆撃機三機が先行して広島・小倉・長崎の上空で待機、気象状況を原爆投下機エノラ・ゲイのチベッツ機長とグラム、テナンの両司令部に報告。

二機はエノラ・ゲイを援護、一機は爆発測定器、一機はカメラを搭載。残る一機はエノラ・ゲイの代替機として硫黄島で待機。

八月六日 アメリカ、原子爆弾（ウラニウム爆弾）リトルボーイを広島へ投下。日本時間八月六日午前〇時三十七分、気象観測機三機がテナン基地を離陸。午前一時四十五分、原爆を積んだエノラ・ゲイ発進。午前八時十五分、広島に投下。作戦を終え基地に帰ったのは午後一時五十八分だった。

八月八日 ソ連、対日宣戦布告

八月九日 アメリカ、原子爆弾（プルトニウム爆弾）ファットマンを長崎へ投下

八月十四日 御前会議、ポツダム宣言受諾を決定

最後の大阪空襲（B二九―一四七機）

八月十五日 日本無条件降伏発表。戦争終結、敗戦

八月三十日 連合国最高司令官マッカーサー、連合国軍総司令部

（GHQ）を設置する

九月一日 新学期始まる

九月二日 東京湾（ミズーリ）艦上で降伏文書調印

九月十一日 GHQが東条英機など、三十九人の逮捕命令をだす

九月二十七日 天皇がマッカーサー訪問する（第一回目会見）

十月四日 GHQが政治、民事、宗教の自由に対する制限撤廃の覚書だす

十月十一日 マッカーサー、人権確保の五大改革指令する

十月二十四日 国際連合が成立する

★一九四六年（昭和二十一年）

一月一日 天皇、人間宣言する

一月二十三日 広島原爆孤児收容の戦災孤児育成所が開所

二月三日 マッカーサー、GHQ民生局に日本憲法草案作成

二月二十五日 新田切り換え開始

五月一日 戦後初のメーデー

五月三日 極東国際軍事裁判開廷

五月三十一日 天皇、マッカーサー会見（二回目）

七月一日 アメリカ、ビキニ環礁で、戦後初めて第一回水爆実験

八月五日 広島、平和復興市民大会（町内会連盟）開かれる

十月十六日 天皇、マッカーサー会見（三回目）

十一月三日 日本国憲法公布

十二月八日 シベリア引き揚げ、第一船、舞鶴入港

残したい母の体験

住井麗子(妙見坂)

「平和の礎」第二集 P10～P13

平和の礎二冊目の、原稿募集を知り、交野市に住む娘の為に、母が、原稿を提出してくれました。これは十八歳で原爆に会い、四歳下の弟を看取った私の母の話です。

…夏になると、水をいっぱい張ったプールで、子供たちが楽しそうに泳いでいるのを見ると、いまだに、弟の顔が、浮かんできます。……『お姉ちゃん、水、水、水、水……最後まで、そう言い続けた弟。死ぬのなら腹いっぱい飲ませてやりやよかったなあと思うて……』

昭和二十年八月六日、原爆が落とされた日、私は十八歳。四歳下の弟『英毅』は宗徳中学の二年生でした。……英毅はほんまに優しい子でした……配給の飴を大事にポケットにとっておいては、泣いている妹の口にいれてやる。そうやって背中に背負って妹をあやす姿が目には焼け付いています。

八月六日の朝、その日も家族はてんでばらばらに、自分の持ち場に飛び出していきました。私も午前七時に楠木町の自宅を出て、江波線の電車通りを、歩いて出勤しました。仕事場の三菱造船所

に着いて、点呼を取ろうとした時、空襲警報のサイレンが響いた。私は「敵機来襲」と防空壕に走り込んだ。警報はまもなく解除されたため、再び点呼を開始する。徴用工の人たちの名前を読み上げようとしたその時、ピカッ、青い光線がさしたかと思うと、ドガーン、という大音響、衝撃が、体中に走る。その場に押し倒される。気がついたら、黒い暗い空、目の前の防空壕もぺしゃんこだ。爆心地から四キロ離れていたため熱波は受けなかったが、何かとてつもなく大きな爆弾が近くに落ちたと感じた。皆ウォンウォンと叫び声をあげながら、倒れた人の上を人が走っていく。私もわけがわからないまま、押し流されて、やつとのことで門を出ると、真っ黒に焼け焦げた人が、『水、水、水、みず……』といいながら、手を前に突き出して歩いている。叫び声、うめき声、黒い人、人。どの人も焼けただれ、服はぼろぼろ、いつの間にか、私も黒い人の波の中にいた。

『どうしたんじやろ、早よう家に帰らにや。』とにかく家を目指す。建物は崩壊しあちこちで火の手が上がり始める。よるよると、気が遠のく、這うようにして土手に出る。ひたすら川筋を北に北に自宅を目指す。黒い雨が横殴りに通り過ぎる。足をつかまれ、つかむ手を払いのけ、死体をよけながら、どこをどう歩いたか、人の列をかき分けながら進む。列の中の人も次々と、もがきながら息絶えていく。炎と煙の中、何とか、横川あたりに出る。朝み

た電車が黒く焼け焦げ、くすぶっていた。橋の欄干にたくさんの人が、しがみついている。随分遠うまわりしたような。日も暮れかかる頃、ようやく家にたどり着く。家は半焼け、ガラスは飛び散り見る影もない。私は、声を限りに叫んだ。『お母ちゃん、お母ちゃん』、暗闇から母のうめき声、母は柱の下に。母を引きずり出す。傷の手当てをするや否や、『家、家が燃えたらいいけん』と言って、母はバケツを持って、家を飛び出した。

その時、私を呼ぶ弟の声が聞こえた。『お姉ちゃん、只今、お姉ちゃん。』『ありや、英毅の声じゃ、どうしたん、どこにおるんじや』大声で言いながら、一生懸命探しても、弟が見つからん。学徒動員で、弟は、疎開作業に出かけていた。英毅は八人兄弟の中で私を一番慕っていた。その英毅が私を呼んでいる。「お姉ちゃん、…お姉ちゃん…」弟は全身真っ黒で、暗闇の中、よう見えなかった。か細い声を頼りに、近づき、やっと探し出して、抱きつく。皮膚がズルリとはがれて、私の手にぶら下がった。顔は火傷で腫上がり、英毅の顔ではない。

『お姉ちゃん、僕一人だけ、立ち上がったんよ、みんなよう立ち上がらんかったよ。』『えらかった、えらかった。ようやった、英毅は強いなあ。』『素晴らしいながら、そこら辺のありとあらゆる布で弟の体をぐるぐる巻いて。遠くで、【空襲警報】、急いで避難しんさい』という声、急いで、乳母車に弟を乗せ、二人で非難場所

を探して川の上流を目指す。

『お姉ちゃん、熱い、水が飲みたい。』『水は飲んじやいけん、憲兵さんが、飲んだら死ぬ、言うとした。』弟をなだめながら川へ着く。少し風が通る所でほっとした時、『お姉ちゃん、おしっこ。』ハットした私は、思わず、『そこへしんさい。』『川でする』『なに言うん、そう言うて川の水を飲むんじやろ、がまんしんさい。』大声で怒鳴ると、弟は『うん』と、うなずき、それきり静かになった。

それで私も、うとうとし始めた。しばらくして朝の気配に目を覚ます。『英毅、朝よ』弟は眠ったまま、『英毅』呼んでも弟の答えはない。気丈な私は、英毅は死んどらん、治療してもらわんと、と、治療を待つ長蛇の列に並ぶ。『だめじゃ、お姉ちゃん、もう亡くなつとるで、はよう焼き場に連れて行きなさい。』そう軍医さんに言われるまで、乳母車を、押していました。

英毅の体から、見る間にうじがわき、まるでうじむしが、弟を食べているようだ。『うじむしめ、うじむしめ、』と。とつてはつぶし、とつてはつぶし。

あれから六十年。時は過ぎ、原爆を受けたことも隠して結婚もし、何度も病院に通い、入退院を繰り返し、現在生きています。

原爆は私一人の問題と心に鍵をかけていましたが、娘は二十歳のときにバセドー氏病をかかえ、その後子宮筋腫、卵管摘出、乳

がんと、病を克服し、孫娘までが、小児白血病に。幼い子供が、二年間の闘病生活。孫娘が幼稚園に入るやいなやの時でした。

『ついに出たか、変わるもんなら、変わってやりたい』原爆の影響は、私一人だけじゃ終わとらん、子や孫の代まで現れた。

そう思ったことが、原爆のあの日を語るきっかけになりました。

今年は縁あって、パリのトゥール市の小中学校と、トゥール甲南学園に語り部として、行きました。『言葉は通じにくくても、彦坂さんの手ぶり身振りで、子供たちにも、原爆の恐怖は、伝わりました。』と先生方に言うていただき、うれしい、ありがたい気持ちになって帰ってきました。これからも、核兵器の恐ろしさを、弟や、二十万の人を、一瞬にして、殺されたことを、一代で終わらない放射能の恐怖を。世界中の人々に、伝えたいと、願って、残りの人生をかけて、語っていききたいと思っております。

(彦坂昭子・記)

追伸語り部二世として

二〇〇八年九月十三日から一週間、私と母は、フランスのトゥール市の小中学校を五校訪問しました。

必死で原爆が落とされたあの日のことを語る母。隣で、わかりやすく通訳してくださる元甲南学園トゥール校の先生。真剣に耳を傾けてくれるフランスの先生と子供たち。言葉は通じなくても、心は通じた、と感じるひとときでした。ここまで母と共にこれ

よかった。私は被爆二世として、そばに立っているのみでしたが、核の恐ろしさは、本人一人だけでなく、子や孫まで影響を与えているということ。また平和を求めて核廃絶の願いを伝える来た。ということは、わかり合えたと確信し熱いものを感じ取りました。そして、平和の鶴として、子供たちと共に鶴を折りました。子供達は、第二次世界大戦の授業の一部として私たちを受け入れてくれ、ジャポネ、ヒロシマ、サダコ、と、いう言葉が、口々に聞こえてきました。ただ嬉しい手つきで鶴を折り喜んでくれた子供たち。心が通じ合うひと時は、本当に、ここまできて、よかった、と、感じる幸せのひとつでした。

どこの学校でも、大変丁寧に接してください、各校長先生方から次の様な言葉を頂きました。

「フランスは核保有国です。パリにも核施設が幾つかあります。核汚染は、目には見えません。その恐ろしさを、あなた方は、トゥールの子供達に、伝えに来てくれました。この子供たちが大人になって、核の選択を迫られた時、二十万人の人を一瞬にして殺す核を選ぶか、平和を求めて、話し合いで解決すべきかを選ぶか、その時、この子供達は、今日のこの日のあなた方のことをきくと覚えていてくれるでしょう、その為にあなた方が遠く日本からやってきてくれたことに、本当に感謝しています。」

と、言っていたきました。来てよかった。日本の悲劇を繰り

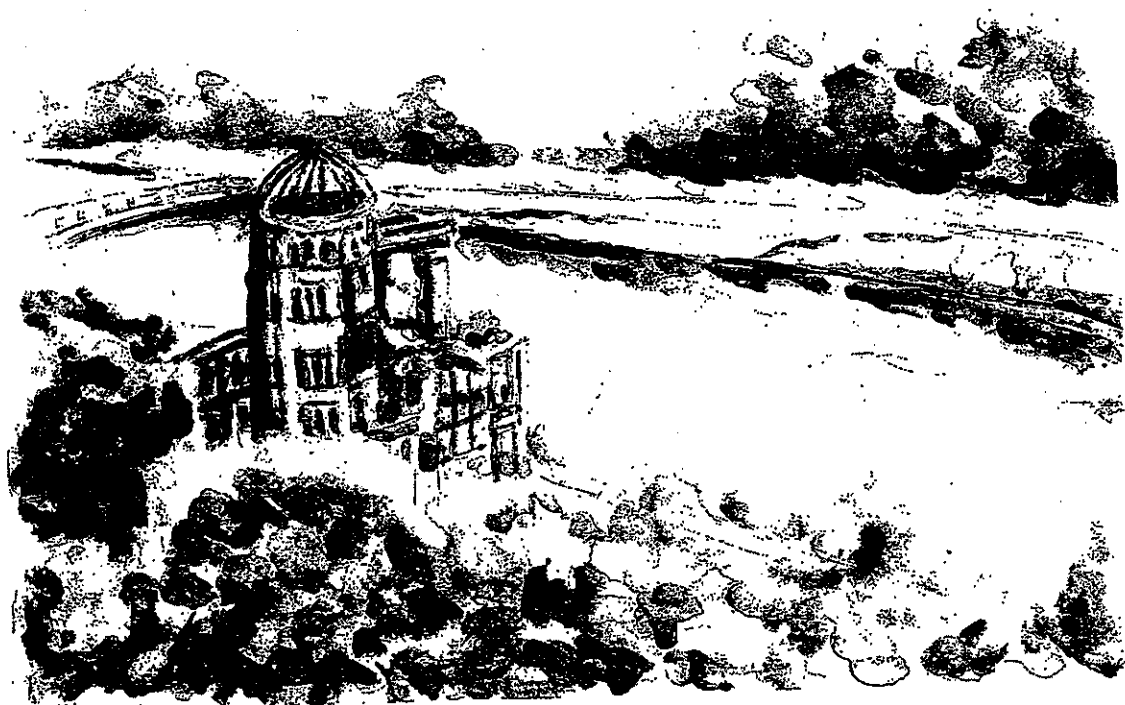
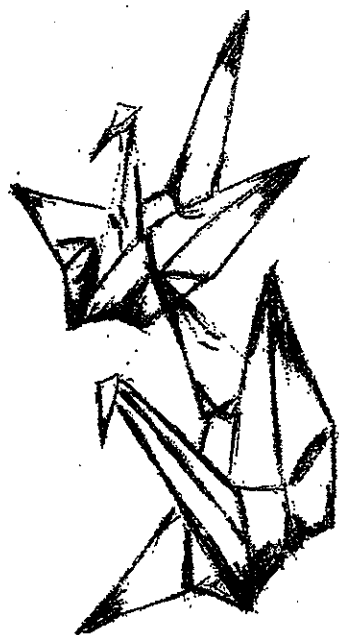
返してはいけない。「ノーモア広島」「核廃絶」を、この私達の祈りは、フランスの人にも伝わった。

そして母は残り少ない人生を生きている限り声を大にして、原爆が落とされたあの日のことを語り、世界のどこへでも行つて、未来の平和を築く子供たちに会いたいと願っています。

この気持ちを込めて今日、この交野の人々へ母の話を伝えて、きる喜びをかみしめています。

また、この気持ちを受け止めてくださった「平和の礎」の編集委員の皆様には本当に感謝いたしております。

ありがとうございました。



激動の時代を生きて

可児義明(妙見坂)

「平和の礎」第三集 P12～P18

非常時の波の中で

昭和十一年、あの二・二六事件の年、私は東京日本橋の橋の袂室町で築地魚河岸の仲買人の子として産声を上げた。母の話では、私は夜泣きが酷く、母が毎晩のように銀座あたりをあやしなうながら歩き回ったそうだ。

昭和十八年に東京駅と神田駅の間にある常盤国民学校に入學。すでに大東亜戦争の真つ只中で、連日ラジオから大本営発表で赫々たる戦果が伝えられ、子供心にもただならぬ気配を感じていた。校門前では毎朝「歩調とれ！」の掛け声のもと足を高く上げ手を大きく振って行進。節目節目での教育勅語の朗読、避難訓練。敵機襲来を告げる警戒警報や空襲警報とともに、授業の中途打ち切りも日を追うごとに増えていった。習った歌も「君が代」「日の丸の旗」「兵隊さんよ、有難う」など。遊びといえど東京駅や昭和通りなどでのトンボやバッタ捕り、日本橋下の川で干潮時にゴカイを捕つての魚釣り。百貨店の中のかくれんぼ。宮城(きゅうじょう)前(皇居前広場)にも時には行ったが、大勢の

軍人や警官が緊張した面持ちで往来していて子供心にも遊びにくいものを感じた。

近隣では、焼夷弾を想定しての防火訓練、竹槍みたいなものを持つている人もいた。「スパイだ！」の声に追われて必死の形相で男が目の前を走り去った。物も急激に不足となり、配給された切符をもつての近くの料理屋での水っぽい雑炊。喫茶店(ミルクホール)などでは原料不足のため紅茶やコーヒーの出がらしをし、リサイクルして使っていた。

百貨店など人出の多い場所には、千人針を求める婦人方が目立っていた。三越のシンボルのライオン像も、金属類回収令により、いつの間にか無くなった。

続く大空襲

昭和二十年肌寒い夜、空襲警報が発令され、私たちは隣組の家の地下室で息を殺していたが夜中過ぎに、誰かの「ここは危ないから外に逃げろ」の声で急いで外に出た。周りは火の海で道路の両側は高く燃え上がる火炎の壁、火の粉が吹雪のように降っていた。火傷を防ぐため防空頭巾などでしつかり身を包んで、母と子どもたちが一塊になって三越百貨店の地下室に必死で避難。すでに多くの避難民が来ていた。早朝、警報解除となり外に出てみるとあたりの景色は一変、くすぶった煙が漂う焼け野が原だった。大勢の方が犠牲になったと聞かされた。

不幸中の幸いに我が家は焼失をまぬかれていた。父は江戸火消しよろしく一晩中我が家の屋上で防火活動をしていたという。関東大震災を経験して災害に敏感になっていた父は「もうここはあぶない」と即断。急遽、伯母夫婦の住む今の調布市に身を寄せることになった。この伯母夫婦は一人息子が徴兵され、遺骨になって帰ってきた後、店を閉じてひっそり暮らしていた。

生き延びる

転居先は当時閑閑な田園地帯だったが、飛行場や陸軍部隊の大きな基地、近隣の山林や丘には軍用の壕があちこちあり、兵隊さんたちがキビキビ動き回っていた。東京空襲はその後も続き、毎夜のように東京上空が赤く染まっていた。日本橋の我が家は先日の空襲の次の空襲で焼失。父親が大事にしていた先祖伝来の武具なども煙となった。特に三月十日の東京大空襲は、B29爆撃機325機、38万発以上の焼夷弾が投下され、十万人以上が殺されたという。その後も数百機単位で何度も空襲があった。無差別爆撃を強硬に主張し実施したといわれる、あのルメイ少将の顔は忘れられない。核兵器使用禁止を強く訴え続けた、かのデルノア中佐の見識とは比較にならない。

新しい落ち着き先も平穏ではなかった。今度は焼夷弾ではなく爆弾による爆撃が続いた。当初は夜間爆撃が主体で、防空壕の中で連日、ピューピューという爆弾の落ちてくる音にまんじりとも

できなかった。時どき外に出て、近くの高射砲陣地からの迎撃を見ていた。探照燈に照らされた敵機が高射砲や時には友軍機の攻撃を受けているがなかなか撃墜できず、いらいらした。飛行機が墜落してくるたびに、なぜか途中までは自分に向かって落ちてくる感じがした。子どもたちは、国のお役に立てばと飛行機や落下傘、銃砲弾などの大小の破片、アルミ製の電波欺瞞片などを集めたりもした。

爆撃は、軍事施設や道路・鉄道の破壊を目的にしているように感じられたが、命中率は低く、そのばらつきがかえって付近の民家を怖れさせた。

爆撃は次第に大胆になり、昼間にしかも低空飛行で機銃掃射も加わってきた。一番近かった爆弾の着弾は三十メートル程で、ちやうど防空壕で昼食を取ろうとしている矢先だ。大きな音と振動とともに壕の天井や壁の土が崩れ、せつかくの食卓も土煙の中、台無しとなった。

このような中で、ある日、機銃掃射しながら来た敵機に遭遇、母と私は道路の中央でなすすべもなく呆然と立ちすくんだ。そのとき飛行機はわれわれの前方で急上昇、こちらを見ている操縦士の姿もはつきり見えた。私は命が助かってほつとするよりも、アメリカにもこういう人がいるということに感動のようなものを覚えた。この頃には米軍の伝單（謀略ビラ）がしきりに空から撒

かれるようになった。

八月になると広島、長崎で特殊爆弾が落とされ大勢の市民が殺されたというニュースが伝わった。数十年は草木も生えず、人も住めないとのうわさだった。そしてその十五日、急に周りが静かになり、玉音放送で終戦を知った。この戦争で三百万人の日本人が犠牲になったといわれる。

戦後のいろいろ

終戦後最初に見た驚きは、進駐軍の上陸進軍だ。道に出たら撃ち殺されるといわれながら家の陰からこっそり見ると、上陸用舟艇、軍用トラック、ジープなど、それらが兵や銃・砲・戦車などを積んで道路を延々と進むさまは、圧倒的で今まで見た日本軍の兵装・兵器や車とまったく異なり、こんな国と戦争をして勝てるわけがなかったと、当時の国の判断の甘さを痛感した。

ひととき厳しい食糧難になった。雑草、どんぐり、蝗など毒でないものは何でも食べた。その中では農家は比較的余裕があったが、金を出しても米を分けてくれない。なけなしの着物など物々交換でやつとなにがしかの米を手ってきた。学校へも弁当を持ってゆくことができず、昼休みに急いで家に立ち返り、粗末ながら親の心のこもった昼食を済ませ学校に戻った。たまには弁当を持っていた時もあったが、ある日、農家の級友が白米ピカピカの弁当を差し出して、私の黒っぽい弁当を見ながら「初めて見るけ

どうまそうだから交換しよう」と言ってくれた。が、母の思いなど複雑な気持ちになり、応じることができなかった。

伯母の話では私のその頃はかなりやせ細っていて、青黒い顔で目だけが光っていたそうだ。学校の身体検査でも「栄養不良」と診断され、体中に吹き出物ができた。

遊びも弟や妹の子守をしながらとなり、家族への配給品を受け取って、担いで帰るのも、長男の私の担当だった。近所の子どもたちも同様だった。

時々行く新宿など都心部は、闇市でこつた返し、傷痍軍人や浮浪者、孤児が大勢たむろ。日本の若い男性の多くは戦争で死んだため、女性結婚もままならず、家族を支えるために街娼「パンパン」や特定の進駐軍男性と付き合う「オンリー」になった人も少なくない。彼女たちは私たち子どもには優しい人が多かった。進駐軍の性病防止用スキンがなぜか子どもたちの間に広がり、風船にして遊んだとき、大人たちからたしなめられたりもした。

米兵にチューインガムやチョコレートをせがんだり、日曜学校でキャンディやケーキが配られたりしたが、私は物を得るために魂を売る思いがして、一度も参加しなかった。いつの間にか近隣に虱（しらみ）が急激に広がり、DDTなどの殺虫剤漬けの日が続いた。

妹がMP（米軍憲兵）のジープに撥ねられ大怪我をして入院。

MPは一回様子を見に來ただけだった。

学校の教科書は、政府や進駐軍に不都合なところを消す墨塗り作業でほぼ真っ黒。「国民が苦しんだのは日本の軍閥のせい」、「民主主義、全体主義、個人主義、自由主義、利己主義……」と、講義をする側も聞く側も強いられている感じで、教育に大いなる矛盾と反感を抱いた。

極東国際軍事裁判（東京裁判）の模様をニュースなどで読み聞きしたり映画で見たりしたが、「勝てば官軍」の理がまかり通っている感じが強くして、情けなく淋しい思いがした。

中学の校舎は兵舎の再利用。先生も多くは軍隊帰り。ビンタ、ゲンコツ、足払い、雪上の正座など体罰は日常。それを受けることは男の勲章とも感じた。特に英語を必修科目にされたことには納得できなかった。近所には米軍基地に勤めている方も多く、生活の手段としての選択科目なら大いに賛成だが、言霊（ことだま）まで屈服することを強いられている感じがした。

銃弾から葉莢を外し、火薬を取り出してはストーブにくべて暖をとったりしたが、或る時誰かが知らせたのか先生が青くなつて飛んできた。時に非合理と思う仕置きを受けたときなど、しばしば近くの物を凶器に反撃しようとする、不思議に必ず親の背中が目の前に現れ、その手を阻止した。腫れた顔や鼻血を親に見せまいと、日が暮れるまで仲間たちと道草した。それでも戦時中

に垣間見ていた軍人たちの体罰に比べれば、まだまだ優しいとも思った。最も感動したのは、クラス男女全員が私のバリケードになつて先生から守ってくれたときだ。級友はいつも私を守ってくれた。

下山事件、三鷹事件、松川事件など怪事件も相次いでおり、子どもの間ではCIAの仕業とうわさした。

第五福竜丸事件から

年を追うごとに国内は、復興への力強い動きが進んでいった。そのような中、昭和二十九年、またまた日本にとつても、我が家にとつても一大事件が勃発した。マグロ漁船第五福竜丸の被曝。南太平洋における米国の、広島原爆の一千倍強力といわれた水爆実験で、千隻以上の船舶が被曝したと伝えられる。そのうちの一隻が二十三人の乗組員を乗せた第五福竜丸で、もしSOSを発信したら米国に傍受され抹殺される恐れもありうると必死で焼津港に逃げ帰ったという。しかし母港でも放射能に対する恐れから、いろいろ差別的な扱いを受けたと伝聞する。久保山無線長も「原水爆の被害者は私を最後に……」の言葉を残し半年後死去。日米両国はなんとか問題が大きくならないよう苦慮した。

煮え切らない政府、男性たちに業を煮やし、女性たちが中心になつて立ち上がり、原水爆反対署名運動を起こし、世界を動かして原水爆禁止世界大会の開催に導いたと聞いた。その熱意とパワ

ーに敬意を惜しまない。

第五福竜丸事件は、マグロ専門の仲卸業の我が家としては致命的な打撃であった。被曝マグロは行政からの命令で埋められたが、被曝していないマグロでもいっさい売れなくなった。マグロだけでなく他の魚も売れなくなった。東日本大震災の福島原発事故などでも野菜や魚介、牛肉類に起こったようにいわゆる風評被害である。鮮度が命のマグロがどんどん傷んでゆく。冷凍会社に預けると相当の費用がかかる。得意先の寿司店さんも客が来ないので仕入れもできないし、買掛金も払えない。ほとんど収入のない生活が半年ほど続いた。父親はもともと江戸っ子気質で、宵越しの金は持たないタイプなので蓄えも少なかった。両親と子ども七人、背水の陣となった。家族の中には進学を諦めなければならないものも出た。商売が元に戻るまでなお半年以上かかった。

かよっていた渋谷の高校の辺りは、ワシントンハイツを中心に米軍人やその家族の住まいが点在し、廃棄物として出される米国の通販カタログや書籍、それと進駐軍向けのラジオ放送(FEN)や洋画は、当時彼らを知る貴重な情報源だった。原宿から六本木辺りはいつの間にか外国語の看板が軒を並べていた。

このころ私は、米軍の中古のブルゾン、寝袋やポンチョ(雨具兼露營テント)などをアメ横で超格安で手に入れて山登りやスキーに使ったが、仲間たちの間ではそれらは朝鮮戦争で戦死した米

兵のものだという。鉄砲水、落石流、滑落など幾度となく危険な目にあったが、そのつど山小屋の主人からも奇跡的といわれたほど助かった。戦死した若い兵士の魂が彼の分も生きてくれ、と守ってくれた気がしてならない。

六〇年安保闘争で樺美智子さんがデモ中に亡くなった。彼女を助けることができなかったことが、今でも苛立たしいし、悔しい。

生きていることの幸運

卒業後大阪の企業に就職。よき伴侶を見つけ昭和三十九年結婚。今の妙見坂に居を構えることになった。敗戦当時四歳の彼女は戦後、北朝鮮からの引揚者である。敗戦とともに家族ともども必死で逃げ戻ったが、そのときは今も決して忘れられないという。軍人たちは真つ先に日本に逃げ帰ったという。残された者たちは、夜陰に乗じての逃避行。途中から、髪を切って顔を汚した女性たちも加わって、声を立てたら捨てられるという恐怖感。着物の中に縫い付けていたお金まで全部巻き上げられた口惜しさ。帰還船の中、ぎゅう詰め船底で立ったまま大小便をせざるを得なかった悲しさ。そして家族全員が奇跡的に生きて日本に帰れた幸運など、何度も私に話をしてくれる。



戦争で亡くなった父・叔父のこと

渡辺悦子(星田)

私は昭和十二年(一九三七年)生まれです。

私が三歳八か月の時、父に赤紙が来ました。お父さん子だった私は、父が出征する時、

「私もいつしよに行つて、アメリカをやっつけてやる」と言いました。

父は

「わかった、わかった」

と言つて出征して行きました。今でもその時のことを鮮明に覚えています。

戦地から届く父からの手紙は、いつも

「悦子は元気になっているか」

で始まっていました。

絶対帰つてくると信じていた父は、中国からビルマに出征、終戦の翌年(昭和二十一年)戦死公報が来ました。遺骨はありません。出征前に頭髮と爪を置いていったのが遺品となりました。

私は、広島県御調郡の父の実家に疎開して祖父母と暮ら

していました。

父の実家は、菓子屋で羊羹、ゼリー等を製造していました。店にあった鉄の大釜や窓ぶちは全部軍に供出しました。

父は九人兄弟(男子七人)で、ここから叔父の話です。

上から五番目の叔父は、通信局に勤めていました。家で手旗信号の練習をして、私も横で真似たりしました。

八月六日、陸軍病院に入院していたすぐ上の兄(上から四番目)の洗濯物を取りに行った帰り広島市内の電車の中で被爆しました。顔中に割れたガラスの破片が突き刺さり血だらけ、真っ黒な顔の姿で、翌日(八月七日)歩いて祖父母宅に帰ってきました。

逃げる途中叔父は、山中で水を求めて山の地面からチヨロチヨロ流れる水を、地面に腹ばいになって逃げてきた人達と、順番に水を飲んだそうです。

帰ってきた叔父は、喉が焼けているので、とにかく水を求めました。

翌々日(八月八日)から四十二度の高熱が出て、食欲がなくなり紫の斑点が出てきました。親戚のみんなで頭に刺さったガラス片をひとつずつピンセットで取り出しました。国民学校一年生の私も手伝いました。高熱でうなされ逃げようとするので押さえつけました。

八月十五日の朝、意識が戻り始めました。おばさんが「戦争は終わったよ」

と声を掛けたのが最後になり、翌十六日に亡くなりました。
十六歳でした。

陸軍病院に入院中だった、もうひとりの叔父は、病院の
庭を散歩中、爆風で吹き飛ばされて胸を強打、ずっと胸を
湿布していたのを覚えています。

その他の父の兄弟みんな戦争に翻弄されて、その後の人
生があります。

—私が伝えたいこと—

戦争は勝者も敗者も絶対いいことはない。

戦争はしてはいけない。

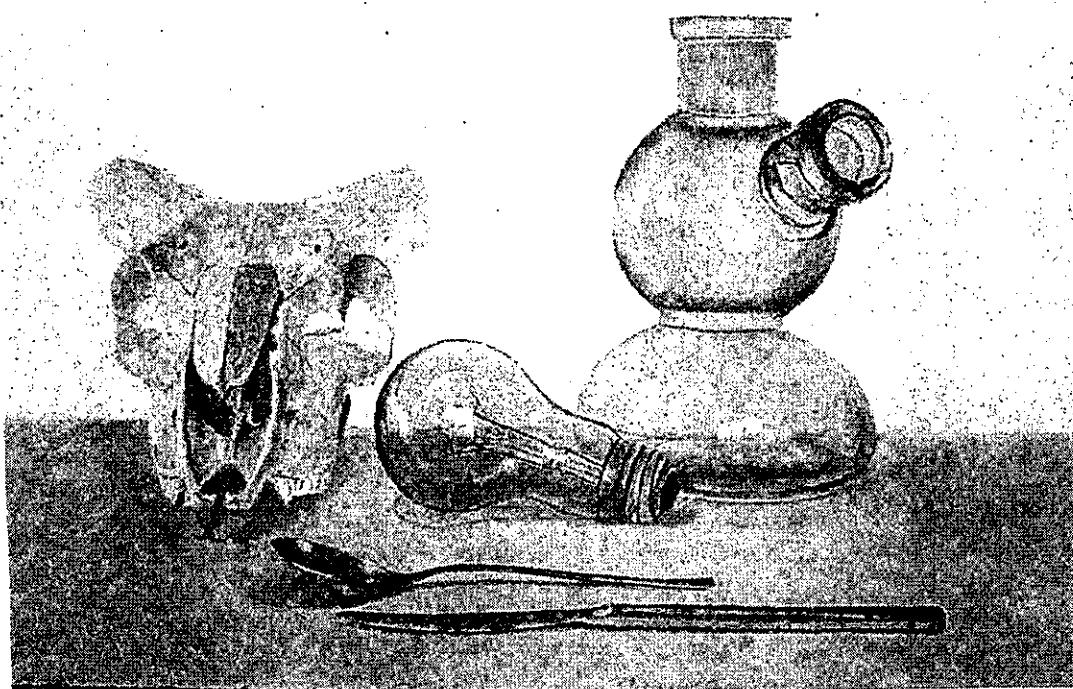
私は戦争、絶対反対です。

『聞き取り』

聞き取り日 令和七年八月

場所 渡辺さんのご自宅

聞き手 玉井・住井



原ばくが落ちた時

彦坂麗子(妙見坂)

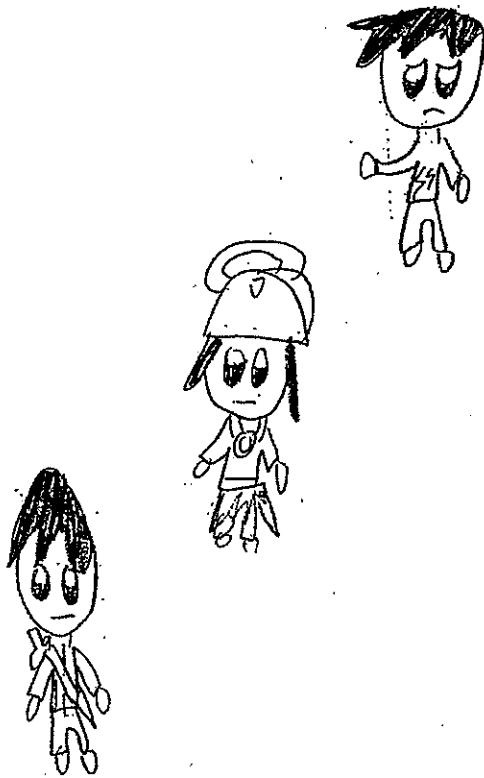
原ばくが落ちた日は十三年前の八月六日です。その時、わたしはまだ生まれていませんでした。原ばくが落ちてそれから三年たって、わたしが生まれました。わたしの母がよくいっています。母の弟ひでき兄さんが生きていたらもう二十五才になっています。だけどひでき兄さんは、原ばくの落ちる前に母も学と動員にいつてひでき兄さんも母とちがう所にべんきようをしにいつていました。母がしごとをしているとピカードンと光つて原ばくが落ちたので母はびっくりして仕事のだいじな物だけでもつてぼうくうごうにはいりました。しばらくすると、むこうから、からだじゅうやけどをした人がまっかになってぼうくうごうをめがけてひなんにやつてきました。母が家に帰る途中、大やけどをして動けない人たちが、子供が母にむかつて「ねえちゃんつれて帰って」といつている人たちがたくさんつれて帰ってつれて帰ってといつてないでいるので母は「一人ならつれて帰ってあげるけど何百人の人が道のほとりに、たおれている人をつれて帰っていたらきりがいいから」といつ

てことわつたが、まん中にたおれている人をおかえて、みんなが通れるようによせてあげてやつと家に帰ったら、家はつぶれて、母のおかあさんやおとうさんがいないので母はびっくりして、おかあさんとおとうさんを大声でよんでいると「昭子や昭子やこたよ」といつている声がするのでも母はすぐいつて見ると、母のおかあさんは家の柱が頭に落ちて、頭から血がかみのけについてきもちのわるいぐらいに血もぐれになつていたので母は自分がほうたいや薬をもつていたのでその薬をつけてあげた。また母の父はみたきで電車に乗つていて、半しんみなやけどをしていました。母がおかあさんやおとうさんの手あてをしていると、ひでき兄さんがからだじゅう大やけどをしてなきなき帰つてきたので、母はびっくりしてひでき兄さんをふとんといっしよに車の上に乗せて大田川のへりにひなんをした。母がひでき兄さんの手を「おいでえ」とひっぱると、ひでき兄さんの手のかわがずるつとむけるようにすぐまっかになつてふくらんでいました。ひでき兄さんがねむつたので母もくたびれて少しねむつていました。母が起きてひでき兄さんをおこそうかと思うとひでき兄さんはもう死んでいました。母はしかたなく死んだ人をやくみたき山に馬やほかの人と一しよにおいてなくなきやいて、ほねをひろつて帰りました。

わたしはもう、あんな原ばくをおとして何百万人の人を

死なすのはもう、にどとない方がよいのだが、アメリカはまた原ばくの研究を始めだしたといっています。わたしたちの国が小さいからといって、いじめなくてもいいと思います。ほんとうにアメリカがくやしいです。アメリカが原ばくを落とさなかったらひでき兄さんも生きています。

この作文は、筆者が小学校四年生（十歳）の時に夏休みの宿題として書いたものです。



私の戦争体験記

坪井貴美子(郡津)

私が十五歳の女学校三年生の時に学徒動員になりました。一番初めはコバタの飴工場でした。あめを一個ずつ(キャラメル)手でつつみます。今の様にオートメーションではありません。十五歳の私達は、一日中立ちっぱなしで足はパンパンにはれ、夕方に帰る時など、コムラがえりがおき、帰ったら祖母が、バケツに湯を入れ、足湯にして、足をもんでくれました。甘いものなどなく、休み時間には、あめのヘタを食べてもよく、それは嬉しかったです。あめを食べながら、(あめは特攻兵の食べ物である)何百万人の人が死んで行かれたと思うと、なげかわしい気持ちになりました。

戦争もたけなわになり、私達大阪方面の学生は、疎開のつもりで、福知山のグンゼに行く事になりました。後でわかったことですが、私達には何も知らされていませんでした。交野を出る時、母や母の友達や、近所の人や親せきの人、二十人程、駅まで送って下さいました。白いカッポウ着に大日帝国婦人会と書いたタスキと防空ズキンを肩に

かけ、日の丸の旗を持って、

「元気でな。こんな小さい子やのに、かわいそう」

と、皆、涙を流し、京都よりに住む者は私一人だったので、父が京都駅まで送ってくれました。私は父のひざに顔をうずめ、泣きました。父はつらかったと思います。

京都駅では友達もいるので涙はかれています。やがて、デゴイチ(D51形蒸気機関車)の汽車が、「ボー」と、汽笛を鳴らし、淋しいやら、かなしいやら、不安やらが入り乱れて、あの「ボー」という音が、ときどき今でも想い出されます。それが地獄の始まりでした。私達の車中は、皆が、泣いていました。

京都福知山の和知グンゼ工場に、学徒動員で行きました。工場での作業中、動力ミシンの針で指を突いて、針が刺さったまま医務室に連れて行かれました。指が動かない痛みより、ミシンの作業から解放される喜びの方が大きかったと記憶しております。とにかく毎日ひもじくて、ひもじくて、柱を削って食べたいほどの飢餓感でした。

食事といえ、食べるものもなく、米十粒ほどに、糠やおからが入った塩で味つけされた汁物でした。ある時、おかゆの中に5cmくらいの白い大きな虫が入っていました。ぶよぶよと太って三匹入っていました。食べた瞬間、へどをはいてしまい、食物をはき、先生に見つかるかと怒られるので、防空ずきんで隠して、はいたものをほうたいで丸めて、

拾って捨てたことは、今でも覚えています。

毎日、あまりにもひもじいので、親元に手紙を書いて、こっそり徴用の女性に頼んで投函してもらいました。六月の暑い夏、家から届いた差し入れの荷物は、二十五日もかかってやっと届き、中にチマキが入っていましたが、すでに腐っていて食べられませんでした。先生から

「一人で食べたらかんで」

と、言われ、腐ってなかったアラレを、六月の暑い中、六人で布団をかぶって、アラレを口の中でしめらせ、噛んだら音がするので、音がしないように食べました。友達のひとりが、

「こんなおいしいのは、二度と食べられへん」

と言ったのが、忘れられません。せまい部屋に六人で寝泊まり、三人ずつ、向かい合わせに、ふとんを敷いて寝ました。すすり泣く子もいました。

とにかく、ひもじいのと、つらいのと、この想いは今の人にわかるだろうか、と思います。

私はおばあちゃん子で、十五歳になるまで箒も雑巾も持ったことがないお嬢さんでした。遠くで汽笛が鳴ると寂しさや辛さで泣きました。

四ヶ月ぶりに八月のお盆に家に帰らせてもらいました。家族が待っていて、特別に白いご飯を用意してくれていました。真っ白いごはんがお茶わんにいっぱいひのせてあって、

父に

「貴美子のおかげで、わしらも、白いご飯にあやかれる。」
と言われて、おいしかったことと、そのごはんを前に、ボロボロ泣きました。

今でも

「ごはんは、必ず自分で炊いて、お供えます」
炊きあがった白いご飯を見ると、ありがたいなと思います。

—現在想うこと 今の若い人に言いたいこと—
もっと政治に関心を持たんとあかん。

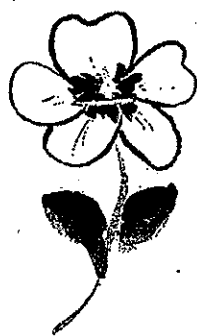
テレビをつけたら食べることばかりやっている。今の人は辛抱が足らん、もつとしっかりして欲しいです。

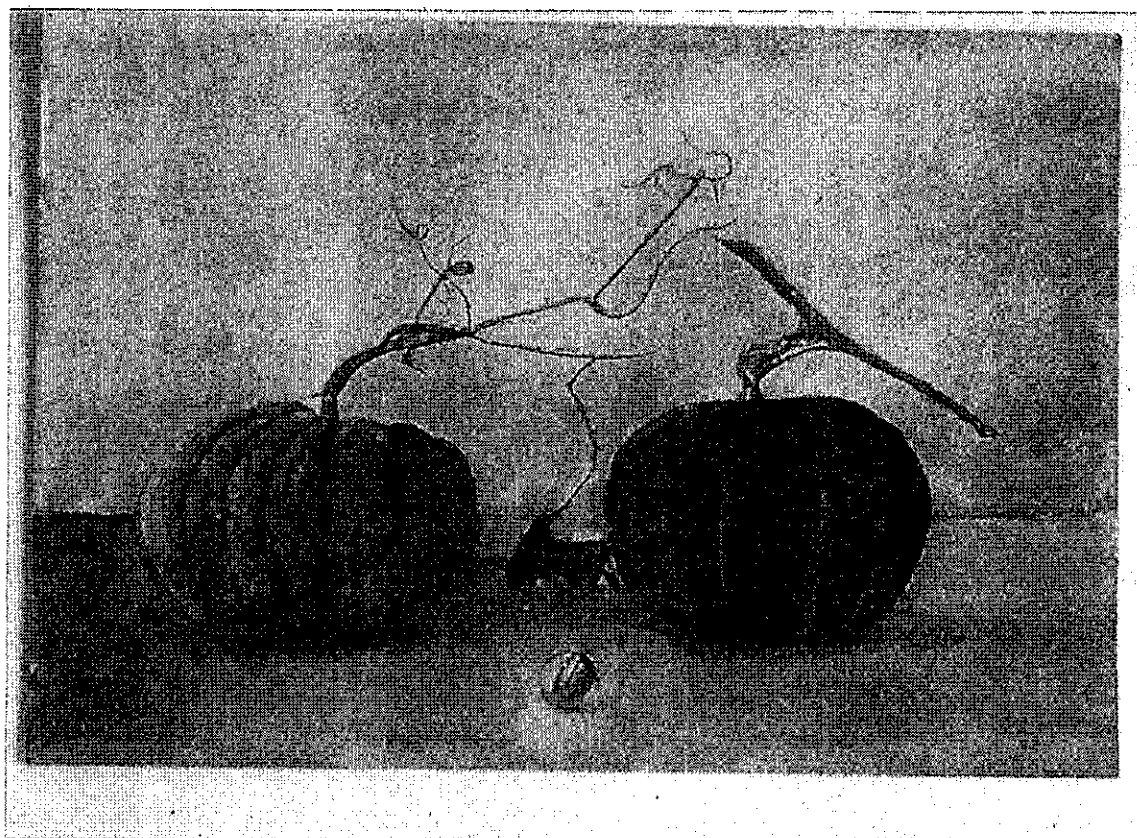
『聞き取り』

聞き取り日 令和七年八月

場所 坪井さんのご自宅

聞き手 玉井・住井





私の戦争体験

高橋敏子(私部)

私は昭和五年に大阪東淀川区の金欄女学校付近の浦江(現在は北区)という地域で八人兄弟の二番目の長女として生まれました。五歳ぐらいから弟や妹の子守をさせられていました。

お父さんの仕事はメリヤスの針を作っていました。が、戦争が続いていて鉄がなくなり仕事がなくなっていました。伯父さんの会社と合併して仕事を続けていました。三年生の時枚方の禁野の爆発がありました。浦江の家のガラスが割れました。金欄女学校の生徒は、はかまと矢がすりの着物を着ていました。温室のある学校で鉄筋校舎もあり、時々遊びに行ってお菓子などを女学生さんからもらいました。

浦江の家は建物疎開で倒されたので、田舎がない我が家は中津に引っ越しました。父が結核だったので私は学校の結核の検査でいつも引つかかっている保健所に検査に行っていました。小学校を卒業するとすぐに学校の紹介で働きに行きました。会社は阪神電車の淀川駅から十分か十五分くらい歩いて通いました。仕事は鉱石からレンズの磨き粉を作る工場で

した。給料は一日五十二銭月給十五円月二日休みでした。どうしてその工場に行こうと思ったかというと工場の名前は鯛生産業(たいせい)という名前だったので、缶詰を作ると思っていたのです。第一工場は鉱石を燃やして取り出す。第二工場はレンズの磨き粉を作る。ほかに出てきた液体をツボの中にに入れて密閉していました。このツボから時間がたつと煙が出てきました。この煙を吸っていたら結核の予防になるという話だったので。私も少しその傾向があったのでこの会社に勤めたわけです。このツボは白い石膏のようなもので密閉していたのですが白いところが黄色くなっていました。この場所は時々爆発をすることがありました。朝、会社に行ったら爆発の跡を見る時がありました。この会社は肥料もつくっていたので工場の空き地で畑を作ってナスやトマトを作りました。会社で作った一か月の収穫物は持ち帰ると十人の家族のため一回の食事で食べ終わりました。会社には売店もありました。父と母がタバコを吸う人だったので、ここでたばこの粉を買って帰り、家で包んでいました。きゅうり、ナス、大根の漬物を作ってもいました。給料は全部母にわたしました。一円を小遣いとしてくれました。最初の小遣いで口紅を買いました。このころは夫婦で働いている人が多かったのです。浦江の家の近くに朝鮮の人たちの部落もありました。「朝鮮の山奥でかすかに聞こえる豚の声、ブー、ブー、ブー」という歌があり、歌うと父に差別したらあかんと怒られました。

憲兵が馬に乗り、サーベルを鳴らして廻ってきていました。低いところにある朝鮮の人の部落は水にかかることもありました。町役の人は差別をしていましたが父は世話やきだったのでそうなる何かと手伝いに行っていました。十二月八日真珠湾攻撃があり、第二次戦争が始まりました。父はこの戦争は負けると言っていました。会社にも防空壕が作られていました。地下に掘っても水、地面の上に土を盛り上げて防空壕を作っていました。中はカタカナのコの字のようになっていました。会社で空襲にあったときこの防空壕に避難しました。防空壕では奥の真ん中に友達と並んで座り目と耳をふさいでいました。空襲で目が飛び出し、鼓膜が破れるといわれていましたから。会社の裏は池でした。大阪空襲で淀川に爆弾が落とされたときみんなで防空壕に入り目と耳をふさいでいました。池でドブーンという音がしました。建物でなく池に爆弾が落ちたのです。（その音は今の水洗トイレのドブーンという音に似ています。）防空壕に入った人はみんな無事でした。そのあとみんなで一緒に家に帰りました。三人は浦江の子でした。浦江には淀川からの荷物を運ぶ運河がありました。この時の空襲では運河に浮かんでいた二、三隻の伝馬船の上で倒れていた人がいたり、運河に浮いていた人がいました。金欄女学校の付近は焼け跡になっていました。友達らは防空壕の中で蒸し焼きになったとも聞きました。この日一緒に会社から帰った浦江の友達とはその後会っていません。私

の家の在る中津に帰ると、向かいの二階建てのうちは燃えていまして、その家の裏が燃えていました。一人残っていたおばちゃんやポンプで水をくみ上げ、バケツに入れて私とリレーで火を消していきました。この時燃えた家の中には練炭や豆炭が貯めてありました。堤防に逃げた人は芦原に隠れたが機銃掃射にあったようです。が、誰もケガしなかった。母は防空壕から出るとき最後になったので十二歳違いの妹を背負い、もう一人の妹の手を引いて梅田に逃げた。梅田の付近は何も変わっていなかったそうです。このころ済生会病院の近くで知り合いが空襲にあった時、ガード下に逃げたが機銃掃射にあつて死んだということもありました。西宮の空襲は夜でした。町が燃えた。その時堤防に避難していたが、飛行機が大きい爆弾を落とした。その爆弾は途中でわれて焼夷弾になって落ちたのでしょうか。見ていた人はきれいやなあと言っていました。

終戦は十五の時でした。天皇の放送は会社で聞きました。会社は解散。百円の退職金をもらって家に帰りました。戦争が終わってやれやれと思いましたが。浦江の友達と別れて寂しかったです。今でも浦江の友達に会いたいと思います。戦後アメリカから一人一箱の配給があり、その箱の中にバターやウインナー、チーズなど食べたことのないものが入っていたのですが、私と父はなんでも食べてみようかと思ったら、近所の人はどうやって食べるか聞きに来たことがありました。

それからが大変でした。

仕事を探していると世界一という靴屋さんがビルを建てていましたので、一番に申し込むと一番に来たからビルが出来たら来てくれと言われたが、母はそれが待てず、メリヤス工場に勤めるようになりました。

メリヤス工場では私は結核になり、病院に行くように言われ、済生会病院で診てもらう一か月は安静にしてください、と言われ、薬は海藻を固めたようなものしかありませんでした。仕事に行ったり休んだりしていると母に働かざる者食うべからずといわれ、腹が立ったので死のうと思つて十三大橋に行つたら欄干が高すぎて飛び出せなかった。そのうち下を見たら人が集まってきたので帰りました。戦後は衣類が高かったです。社交ダンスがはやり、ダンス教室もあり兄や弟はよく遊んでいましたが、私はダンスは好きになれませんでした。昭和二十五年二十歳で高橋さんと結婚。私部に住むようになりました。口減らしと思うが浦江の家の向かいに高橋のおじさんがいて、父が代書をしていたという関係もあつたかとも思います。

『聞き取り』

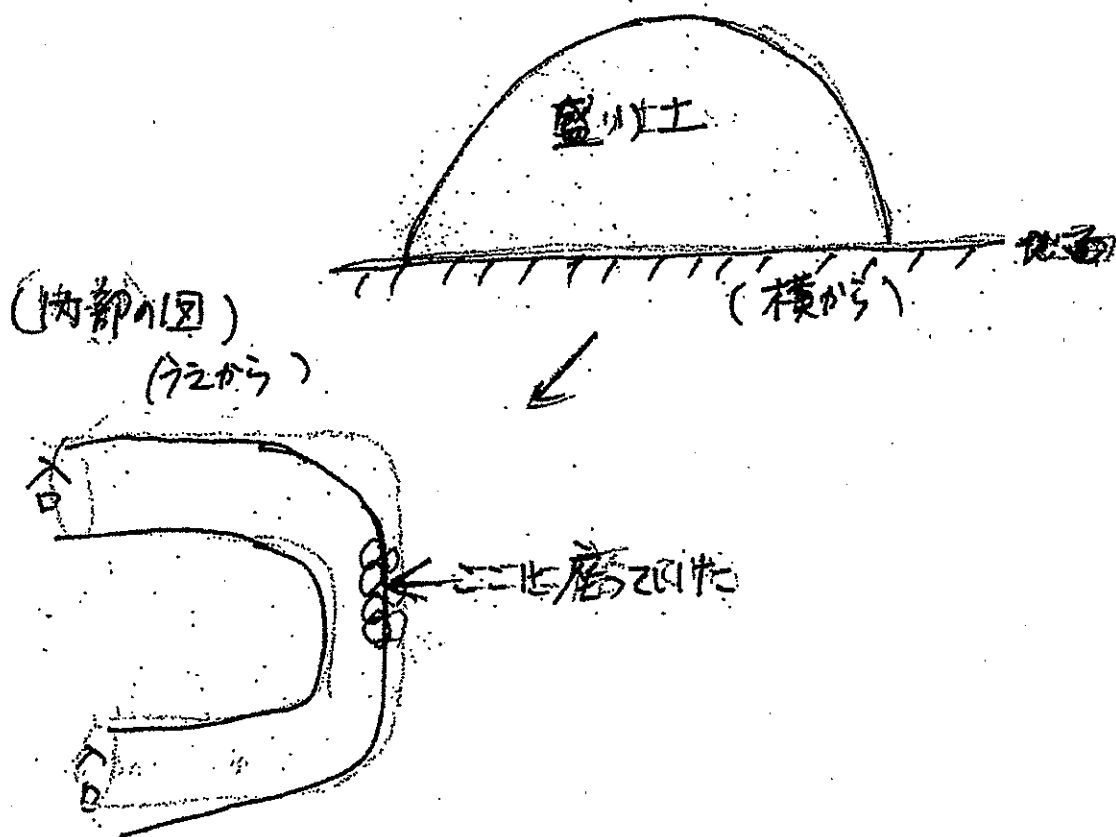
聞き取り日 令和七年六月

場所 高橋さんのご自宅

聞き手

久保

(防空壕の図)



私の戦中・戦後の体験

寺田露子(天野が原町)

私は昭和二年東成区今里で二人姉妹の長女として生まれました。

鶴橋第三小学校に入學しました。

小学校卒業後、境川女子商業を受験、合格。路面電車で通學しました。学校ではほとんど勉強はなく奉仕活動が多かったです。梅田で千人針を頼んでしてもらったり、戦地の兵隊さんへの慰問袋をつくったり、軍需工場での奉仕活動をしていました。三国の昭和アルミの工場で飛行機のプロペラの部品を磨いていました。お国のためと思ったので苦勞ではありませんでした。防空壕は地面に穴を掘って上に畳をかぶせたようなものでした。昭和二十年くりあげ卒業。戦争の中での学校生活でした。このような中でも友達と歩いて京都まで行き、嵯峨野の竹林を見てきれいと話す楽しさもありました。

十八、十九歳の傷つきやすい年ごろでした。

その後女子挺身隊に所属しました。働ける人が少なくなくていったので、いろいろな仕事の女の方がいきました。軍

需工場への仕事が多かったです。

電車に乗って移動中に車掌さんが「空襲警報」というと、乗客はみんな降りて草原や溝に隠れました。草原にウサギを打つような飛行機からの機銃掃射がありました。あのあと、打たれて亡くなっている人もいましたがそのまま電車は動き出しました。このようなことが日常だったので怖いと思いませんでした。別の女子挺身隊に所属していた友達とは森ノ宮の陸軍砲兵工廠が爆撃されたとき死亡したと聞きました。物資はなく親は大変だったと思います。食料は配給制で甘いものはなく、お菓子屋の娘にうまれたかったと友達といっていました。麦ごはん一日三合、固形醬油で味付けしたものでした。みんな同じでした。薪がなくなり本を破いてご飯を炊きました。

大 阪 空 襲

三月十三日に家が焼け、熊取の母の実家に荷物を荷車に積んでいきました。納屋を借りて住んでいました。終戦の日(八月十五日)の天皇の話は疎開していた家で聞きました。ゆっくり寝られると思ったのでうれしかったです。

戦後は必死でした。声をかけてくれる人がいて村役場に行きました。田舎でしたので食料は手に入りませんでした。なんばきびの配給があり、それをパン屋にもつていきパンと交換してもらっていました。戦争でなければおしゃ

れをして楽しい青春だったと思いますが、みんな同じです。時代がそうでした。女の人には戦死ではなく爆死だ。と思います。

先生は神様と思っていました。なぜ本当のことを教えてくれなかったのかと今も思います。

結婚をして子育てに忙しかった時期が落ち着いて、本を読みいろいろなことを知りました。シンガポールや沖縄に行きました。沖縄に行きましたのは、同じ時代を生きたものとして私もひめゆりになっていたと思い、身代わりで行ってきました。

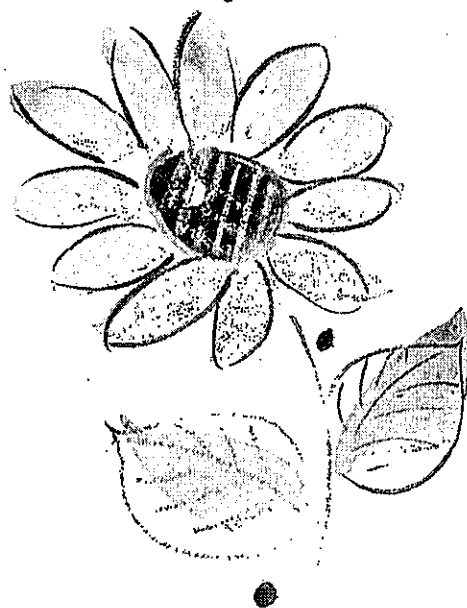
夫も戦争に行つて、帰ってきた人でしたがその体験はあまり語らず胸に思うものはいっぱいあったと思います。夫の死後、聞いてやればよかったのではと後悔があります。

『聞き取り』

聞き取り日 令和七年六月

場所 寺田さんのご自宅

聞き手 久保



平和と人権を守る都市宣言

あなたの強い願いがあるから
きっと 核や戦争はなくせる

あなたの暖かい愛があるから
きっと 差別や虐待はなくせる

交野のこころは「和」
「平和と人権」はその命

かけがえのないものを
あなたと共に守り抜きたい

そして さらにその輪が
全地球に広がることを念じ
『非核・共生・非暴力都市 かたの』
を ここに宣言します。

平成 13 年 11 月 3 日

交 野 市

City Declaration on Observance of “Peace and Human Rights”

With our strong will, we can eliminate nuclear weapons and wars.

With our love, we can eliminate discrimination and abuse.

The spirit of Katano is “WA” or “Peace.”

The desire for peace and the respect for human rights are at
the heart of Katano.

Together we stand and together we protect what is precious in life.

We wish that this circle of hope extends to and unites all people
throughout the world.

Based on our commitment to these principles, we hereby
declare Katano to be a
“Non-nuclear, abuse-free city with compassion for all humanity.”

November 3rd, 2001

City of Katano

Translation: Multilingual Center, FACIL (NPO)

あとがき

「平和の礎」第七集発刊の運びとなりました。

太平洋戦争は三年八か月という長さでした。その被害や苦痛・苦悩は想像を絶します。

今生存されている方々に当時の体験の聞き取りや、原稿集めも困難になってきています。

発刊の各集に掲載している交野市の「平和と人権を守る都市宣言」は、二十一世紀への希望と決意の「宣言」です。その希望や決意に反して「いのち」が脅かされつづけている今、改めて、強い願いや温かい愛による共同や連携・共生の輪が、全地球に広がることを念じるものです。

寄稿くださいました皆さま、ありがとうございました。

編集者 平和継承事業部会

編集委員 草薙正己

勝田敬二

久保隆枝

清水秀子

住井麗子

玉井八恵子

吉川佐喜子

挿絵 梶本博子 古賀啓三郎 清水秀子 清水僚太

「平和の礎」 いしずえ

――交野在住者の戦争体験集第七集――

令和八年三月発行

発行者

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

(市)総務課

交野市私部一丁目一番一号

電話〇七二一八九二一〇二二